

平成 20、21 年度
中期目標の達成状況報告書
(別添資料)

平成 22 年 6 月

静岡大学

目 次

資料 1	技術者の実践対応力育成カリキュラム	1
資料 2	原子力人材育成プログラム成果報告書	2
資料 3	静岡市中山間地域における農業活性化	3
資料 4	静岡大学教職大学院の特色	4
資料 5	マニフェストに基づく実践的 IT 人材の育成	5
資料 6	アドミッション・ポリシーの変化	6
資料 7	大学入試センター試験を課さない推薦入試	7
資料 8	工学部で国立大学初の秋季入学式 NIFEE プログラムスタート	8
資料 9	学際科目 ベトナムに学ぶ	9
資料 10	人件費削減計画及び教員の戦略的配置について	10
資料 11	第 1 回静岡大学学生生活実態調査報告書	11
資料 12	国際交流等に伴う危機管理対応マニュアル	12
資料 13	浜松・東三河地域における産学官連携拠点の整備に 関する計画書	13
資料 14	「True Nano」を実現する 21 世紀先端プラズマ	14
資料 15	キノコ中の急性脳症原因物質の特定と発症機序の解明 及び検出法の開発	15
資料 16	東海 iNET	16
資料 17	静岡技術移転合同会社	17
資料 18	静岡大学テニユア・トラック制度の推進体制	18
資料 19	静岡大学社会連携協働システム	19

資料 20 「制御系組込みシステムアーキテクト養成プログラム」	
実施体制	20
資料 21 地域食品産業の安全と安心を支える実務型分析オペレータ	
育成のための再教育プログラムの開発・実証	21
資料 22 農業ビジネス経営体育成のための教育体制・プログラムの	
構築・検証	22
資料 23 女子中高生の理系進路選択支援事業	23
資料 24 サイエンスカフェ in 静岡	24
資料 25 静岡大学・読売新聞連続市民講座・中日新聞連携講座	25
資料 26 静岡大学創立 60 周年事業 静大フェスタ	26
資料 27 静岡大学創立 60 周年事業 ホームカミングデー	27
資料 28 海外フィールドワーク演習	28
資料 29 静岡大学国際交流	29
資料 30 JAIC コンサルタント等登録通知書	30

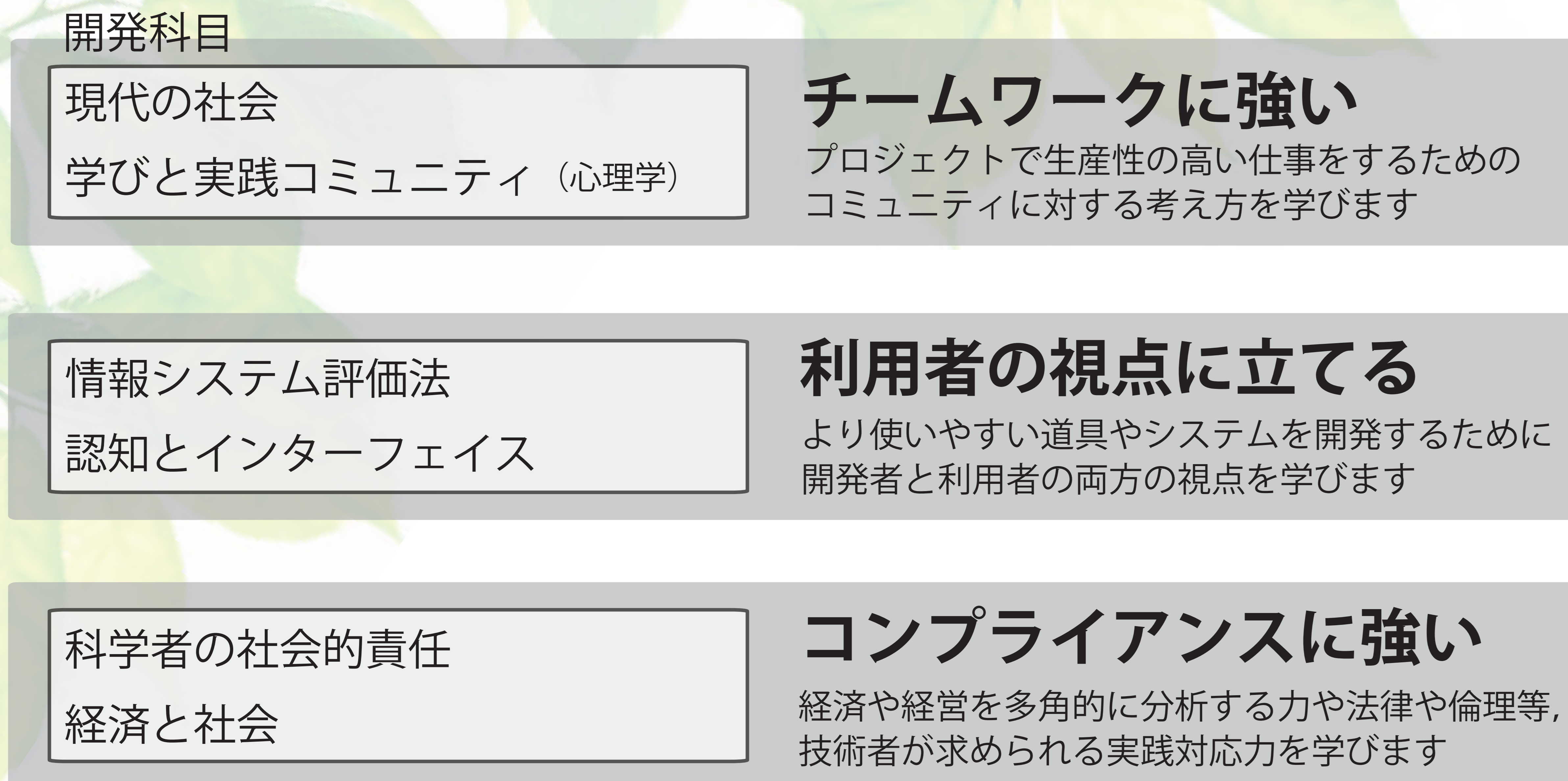
技術者の実践対応力育成カリキュラム

今日の技術者教育では専門的な知識のみならず基盤力や周辺の知識を併せて育成していくことが求められています。そこで、本取組では、その専門的な知識を実社会で活かすための周辺の領域の能力を実践対応力と定義し、その能力を育成するカリキュラムの開発、実践を行いました。

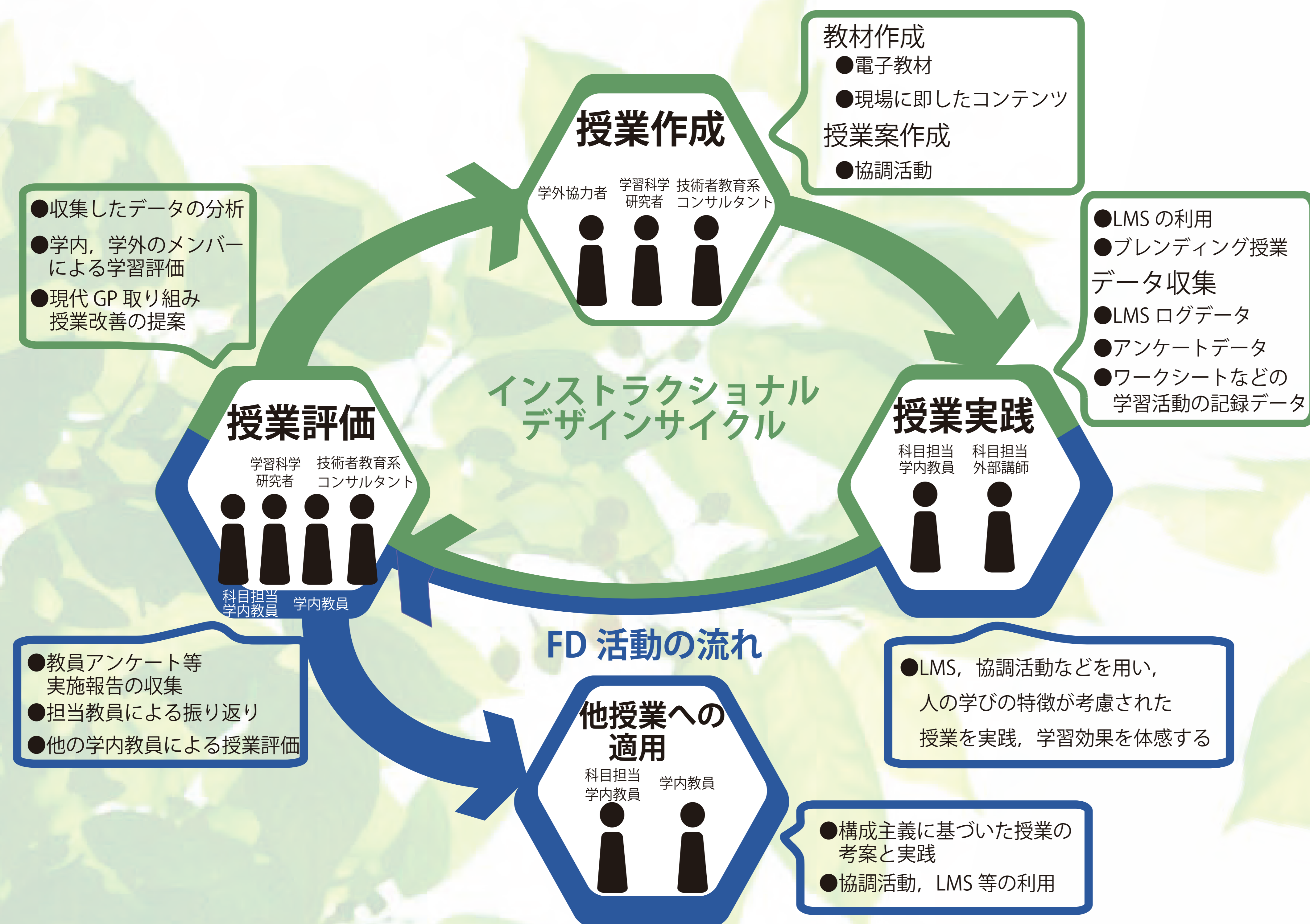
カリキュラムは3分野6科目と科目履修前に視聴するキャリア形成ガイダンスによって構成されています。

◆3つの人材モデルと開発科目

キャリア形成ガイダンス



◆教員参加型 FD 活動システム

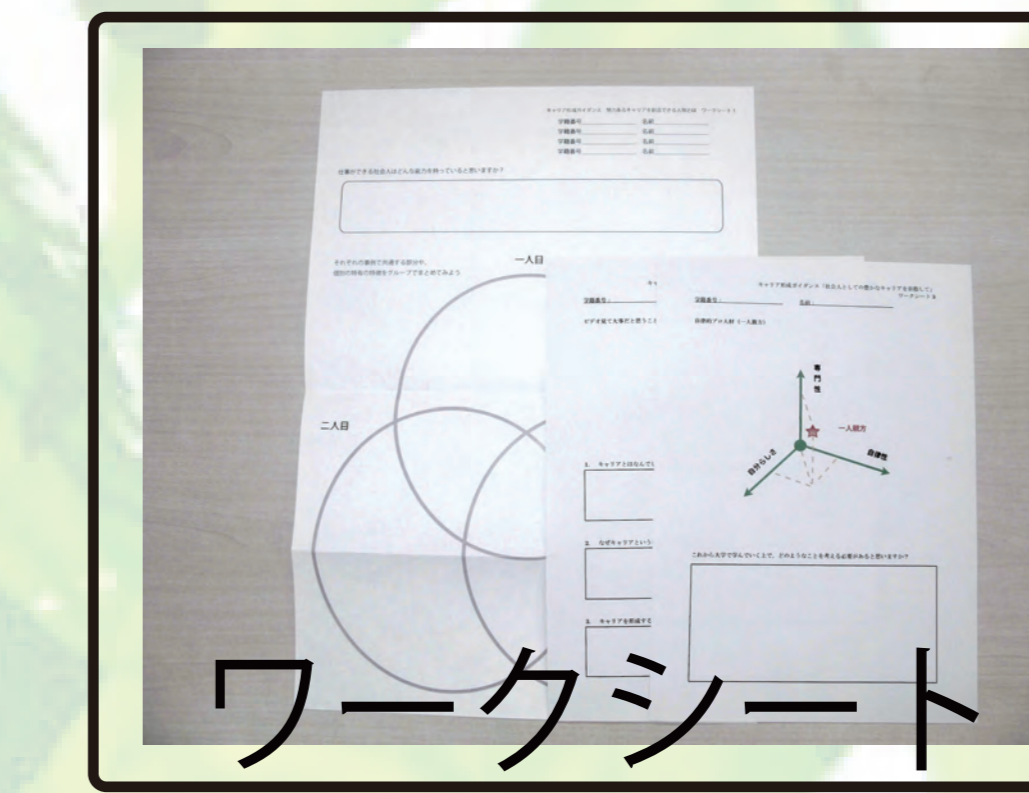


◆授業パッケージの作成 <キャリア形成ガイダンス>

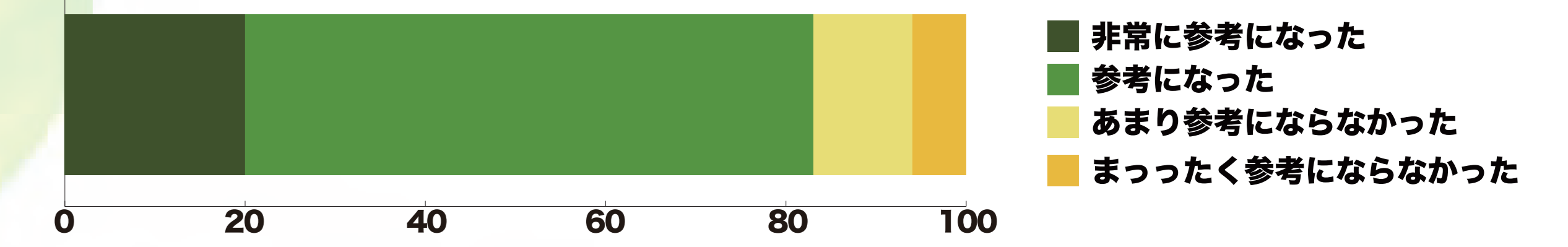
◆授業パッケージ



講義動画

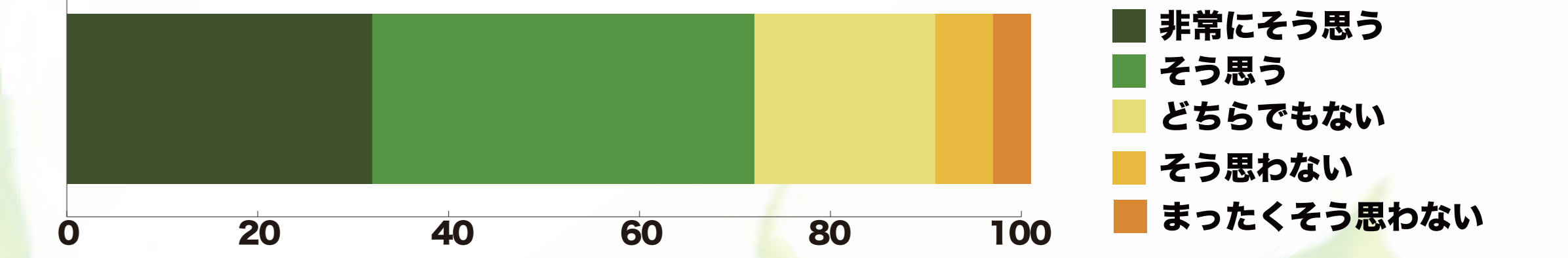


教員：授業案をどれくらい参考にされましたか？



◆教員コメント
学生はこの講義を通して、大学での勉強を将来の職業で必要な能力形成につなげることを必要と感じ取れたと思いました。また、社会人としての心掛けを再確認するという点で、教員が見ても参考になると感じました。

学生：授業で聞いた「キャリアの話」は自分の大学生生活の今後に役に立つものだと感じましたか？



◆学生コメント
一年生のこの時期にこの講演を見てよかったと思う。これからの大学生活を大事にしていきたいと思った。

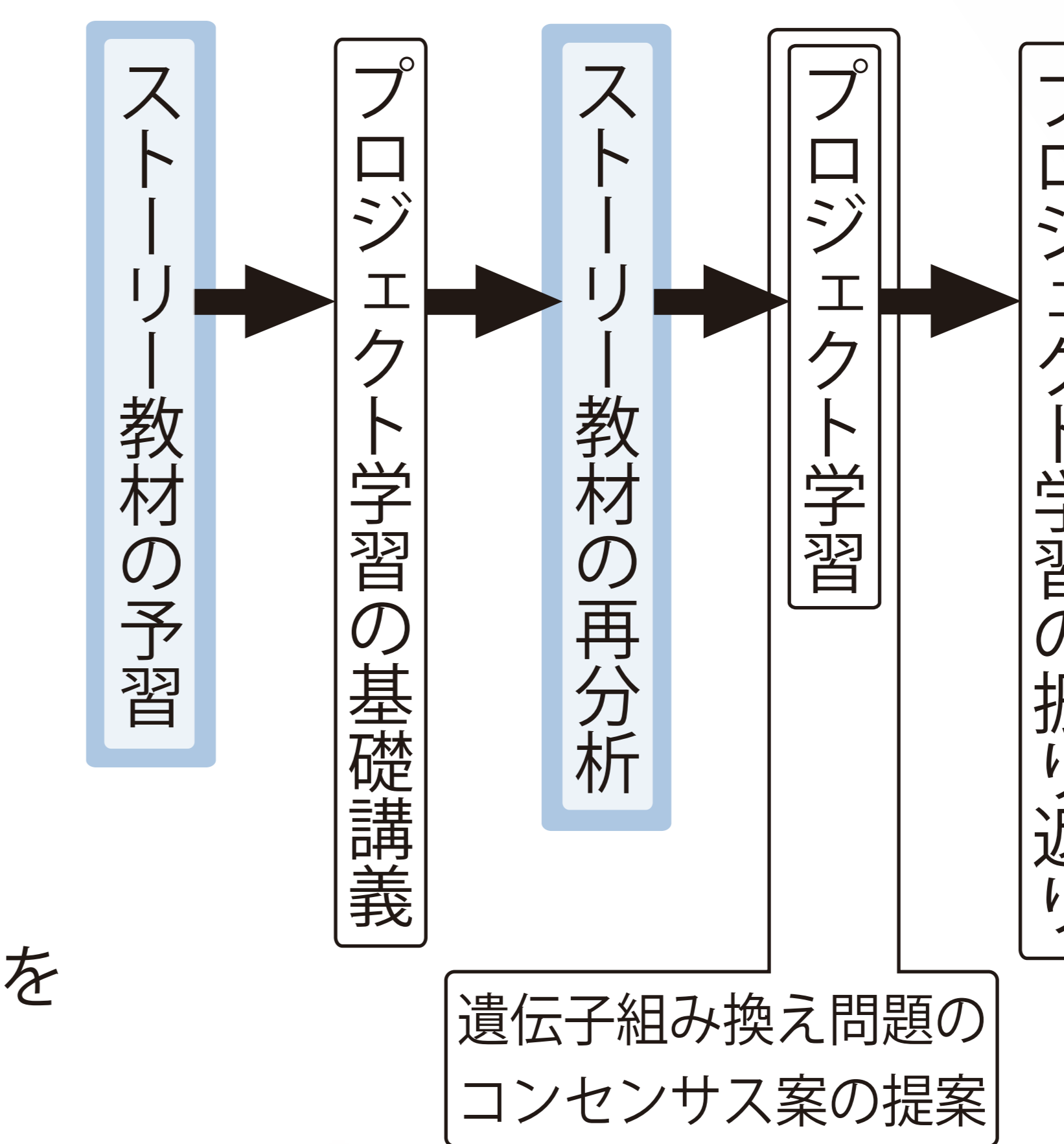
◆電子教材の作成 <学びと実践コミュニティ(心理学)>

◆ストーリー電子教材



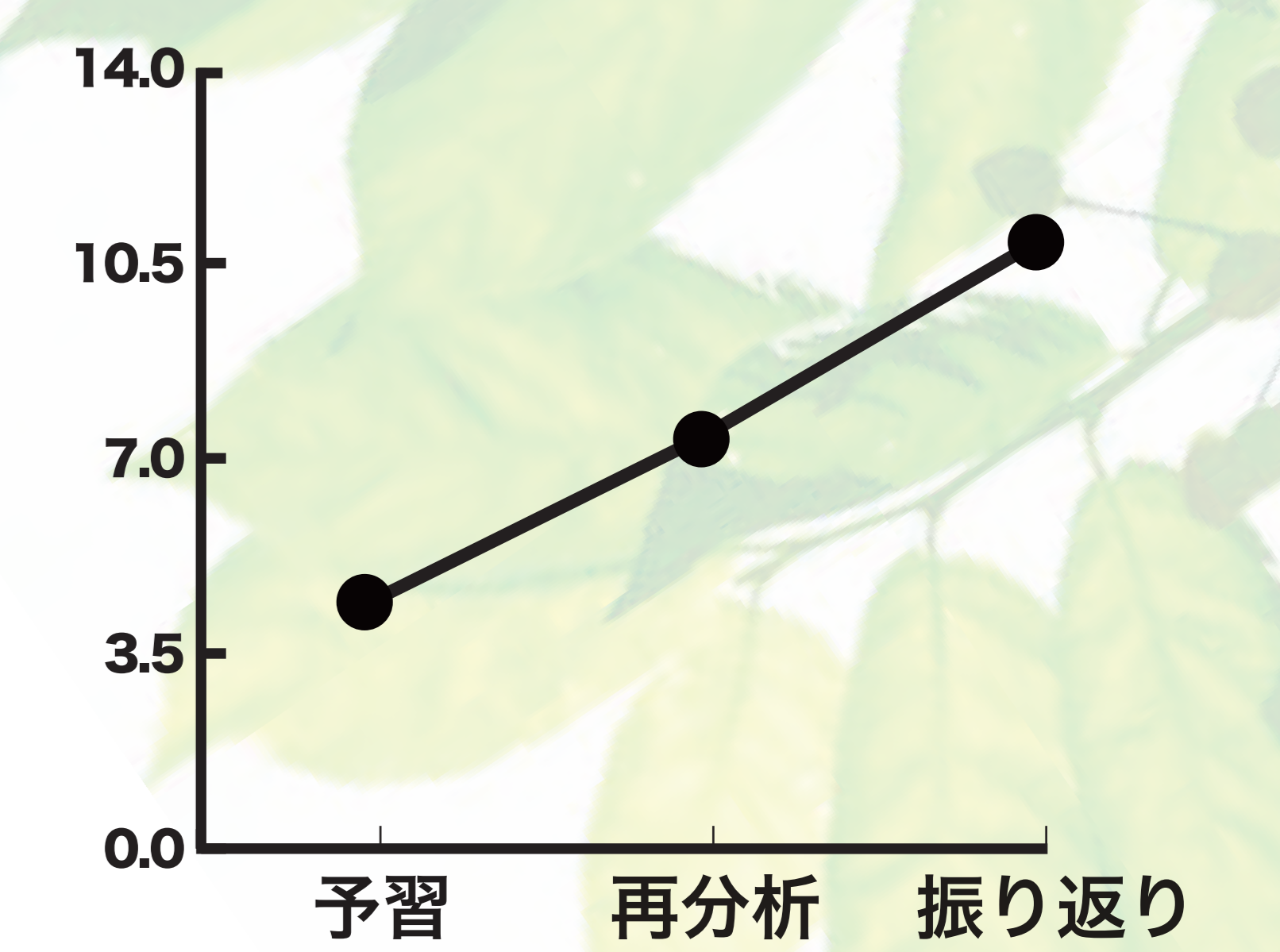
実社会のプロジェクトで実際に起こりうる問題を大学生が身近に捉えられるようにアレンジ

◆講義の流れ



遺伝子組み換え問題のコンセンサス案の提案

◆講義の成果



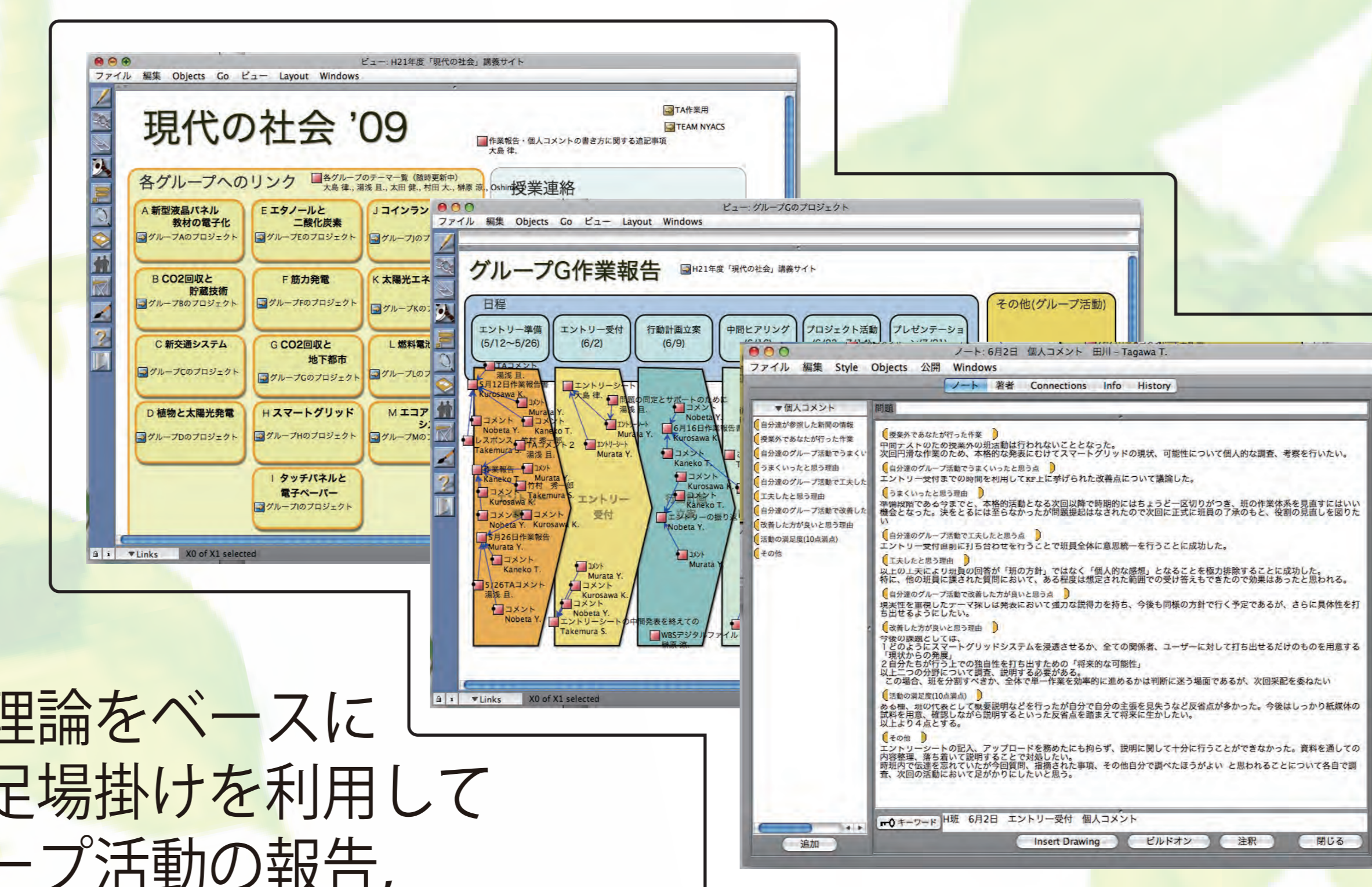
授業のそれぞれの段階で学習目標全 14 項目がどれだけ意識されていたか

◆ICT の利用

◆「現代と社会」の講義内容

新聞やインターネットの情報を元に時代が求める新しいエコロジー技術を提案するプロジェクト学習

Knowledge Forum™

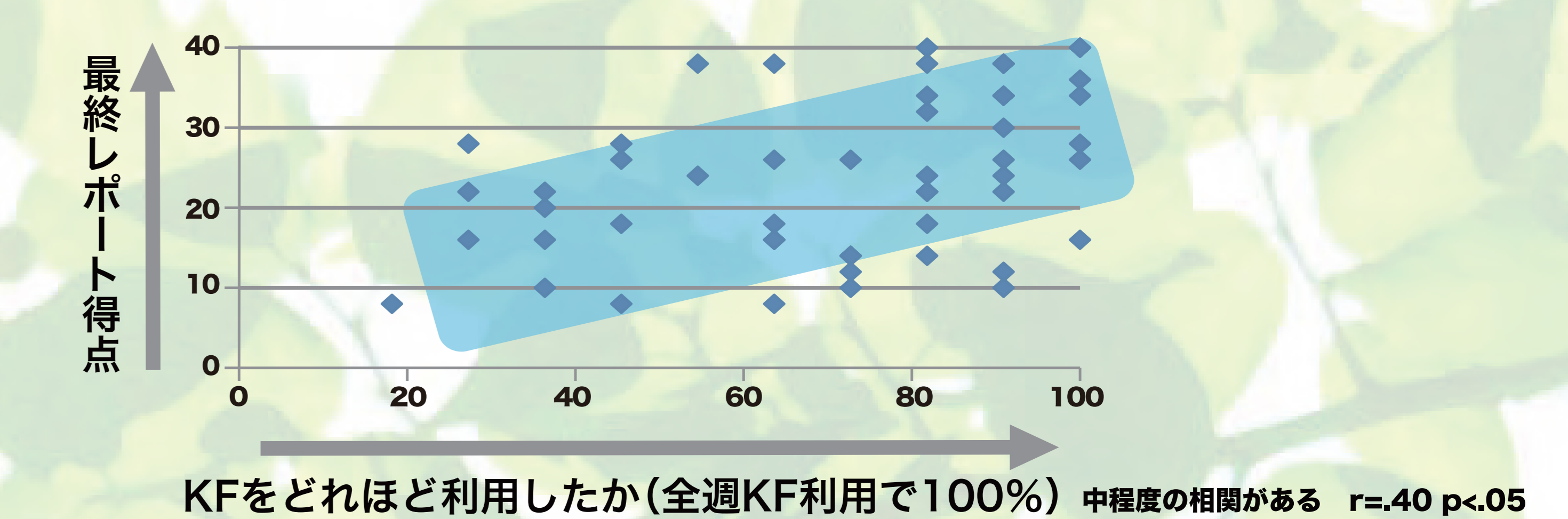


活動理論をベースにした足場掛けを利用してグループ活動の報告、振り返りを KF 上で行う

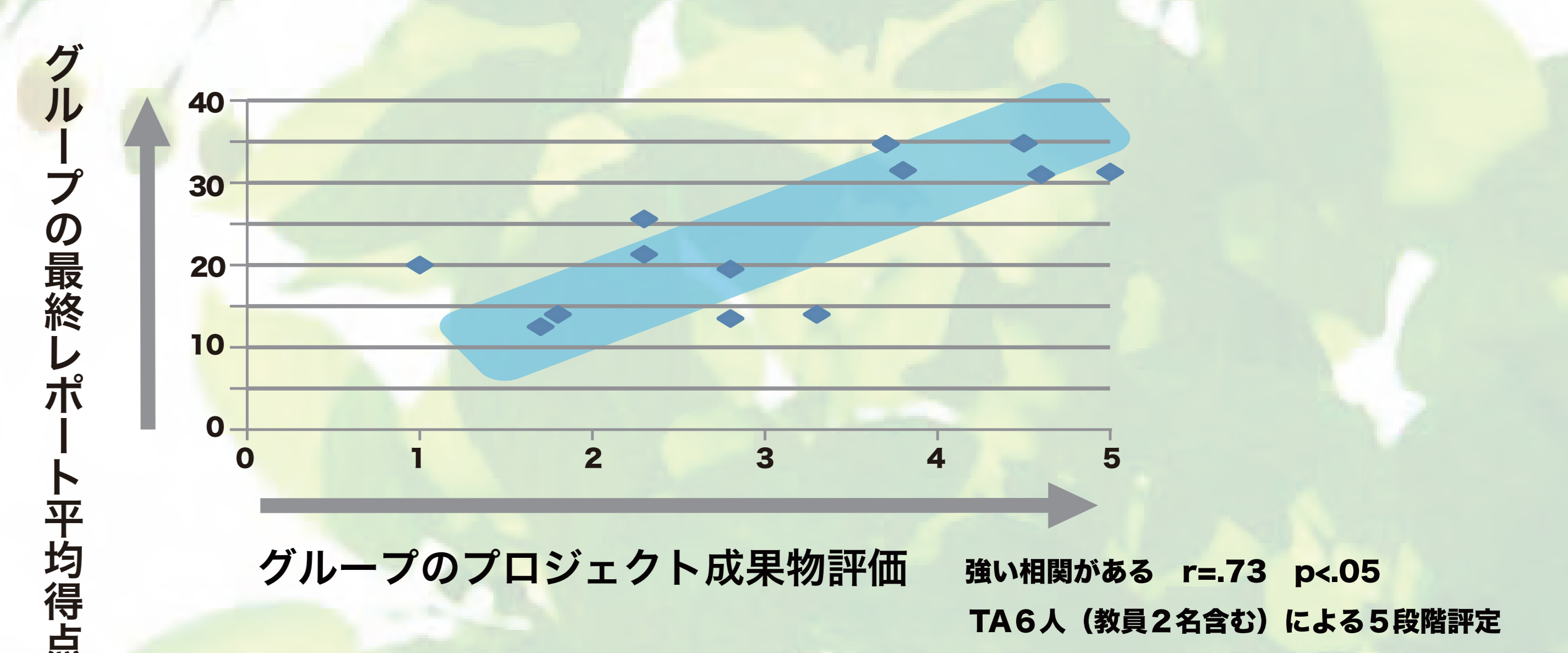
<現代の社会>

KFの利用と最終レポートとの相関

最終レポート：プロジェクトマネジメントを理解して今後は自力でいかせるか



グループの最終レポートとプロジェクト成果物評価との相関



平成21年度原子力人材育成プログラム成果報告書(概要版)

原子力教育支援プログラム(経済産業省)
静岡大学
理学部: 奥野健二、大矢恭久

<提案事業概要>

本事業では、平成20年度原子力人材育成プログラム・原子力研究促進プログラム「学生提案型放射線管理実習プログラム」において構築した放射線管理実習プログラムを器として、さらに発展的に放射線のみならず原子力をも含めた新しい放射線管理実習プログラムを構築・実践することにある。これまでの放射線の基礎知識を教授するだけに留まらず、原子力における放射線・安全管理のあり方や原子力の仕組み、あるいはエネルギー・環境問題を克服するためには原子力はどうすべきかを座学のみならず学生自らが行動を起こし、その解決方法を見だし、原子力やエネルギー問題と自分の将来とを密接に関連づけて考えることができる人材を育成する。

1. 目的・背景

・本学では理学部附属放射線科学研究施設を中心に放射線安全を含む放射線教育を特徴ある教育の一環として実施してきた。
・放射線取扱主任者試験への積極的な受験を学生に喚起し、これまでに40名を超える学生がすでに大学在学中に本試験に合格しており、放射線・放射能への興味が高い。
・平成20年度原子力人材育成プログラム・原子力研究促進プログラム「学生提案型放射線管理実習プログラム」において、放射線管理実習の実習課題の充実化を図ることができた。
・原子力系産業への人材需要に応え、工学系学生とは異なる理学的視点を有する学生への原子力産業への興味を引き出すために本学のカリキュラム中の実習科目である放射線管理実習に発電所で学ぶ実習課題を加える。
・本事業において、種々の原子力施設を訪問し、実際に原子力の現場を体感し、原子力産業への興味を引き出す。
・エネルギー・環境問題と自分の将来との密接に関連づけ、自らがなすべき役割や将来への展望を導き出す。

2. 実施概要

・二回(前期・後期)の放射線管理実習への学生の参加募集と動機付けのために、原子力研究開発の専門家を招聘し、二回の講演会(全3回のうちの2回、前期148名、後期88名参加)を開催した。
・大学院生が中心となり放射線管理実習参加学生への原子力施設見学のための事前学習・事後学習を実施し、大学院生のスキルアップと学部学生の理解度を高めた。
・前期の参加学生には九州電力玄海原子力発電所および日本原子力発電株式会社を訪問し、PWRやプルサーマルの進め方および核燃料サイクルの現状について学習した。(参加学生28名)
・後期の参加学生には関西電力美浜原子力発電所と日本原子力研究開発機構「もんじゅ」および東京電力柏崎刈羽原子力発電所を訪問し、原子力事故と安全への努力、高速増殖炉の開発現状および原子力発電所における地震対策について学習した。(参加学生28名)
・中部電力浜岡原子力発電所の協力を得て、放射線管理実習の1日分の実習課題を浜岡原子力発電所内で実施した。(参加学生前期26名、後期26名)
・まとめの講演会(全3回のうちの1回)を開催し、原子力研究の専門家から講演してもらったとともに、放射線管理実習参加者から原子力施設見学の報告会を行った。また、放射線管理実習の講評として放射線研究の専門家および中部電力浜岡原子力発電所での放射線管理実習に立ち会った講師から講評をしていただき、放射線管理実習の意義と学生の将来へ向けての期待について意見交換した。(参加学生60名)



九州電力玄海原子力発電所訪問
PWRのしくみとプルサーマルに向けた取り組みについて学習した。

日本源燃株式会社訪問
核燃料サイクルのしくみと現状について学習した。



日本原子力研究開発機構もんじゅ訪問
高速増殖炉のしくみと現状について学習した。

東京電力柏崎刈羽原子力発電所訪問
原子力発電所における地震対策と地震による影響について学習した。



第一回講演会の冒頭で挨拶する奥野健二
静岡大学長

第一回講演会において満席の講義室
静岡大学長

連絡先: 静岡大学理学部附属放射線科学研究施設、大矢恭久

連絡先: 静岡大学理学部附属放射線科学研究施設、大矢恭久



第二回講演会で放射性廃棄物処分について講演する松田美夜子原子力委員

第三回講演会でアジアにおけるエネルギー問題について講演する田中知東京大学教授



中部電力浜岡原子力発電所内で実施した放射線管理実習風景(管理区域内での放射線管理、気体廃棄物濃度管理、運転訓練シミュレータを使った原子炉の制御、環境放射線測定)

3. 成果

・放射線管理実習に新たに浜岡原子力発電所で実施するための4つの課題を設定し、追加することができた。これまで原子力発電所では見学や簡単な放射線教室が主であったが、今回初めて大学のカリキュラムの一環となる課題を作成することができた。
・原子力施設訪問では、普段立ち入ることに許可されない現場まで見学することができ、学生への原

連絡先: 静岡大学理学部附属放射線科学研究施設、大矢恭久

子力への興味向上につながった。

・原子力施設訪問では事前および事後に大学院生を中心とした勉強会を実施したため、施設訪問学生の目的意識を高めることができたとともに、理解度が一般の見学と比べて高いように感じられた。また、予定時間を超えても質問が続く、学生の興味の高さがうかがえた。
・中部電力浜岡原子力発電所における放射線管理実習では、放射線管理手法を学ぶとともに、実際に発電所の中での放射線管理の考え方や職員の意識が学生が直接肌で感じる機会をもつことができ、とても貴重な経験になったという感想が多かった。
・エネルギー問題と原子力を結びつけられ、そのための放射線安全の意義を講演会や実習を通して理解させることができた。また、理学系学生にも原子力において重要な役割があることを理解させることができた。

4. 取組の評価と今後の展開

・原子力・放射線の専門家を招聘し、エネルギー・環境問題から放射線リスク、放射性廃棄物の処理処分そしてアジアにおけるエネルギー問題と理学系学生の役割について講演会を開催し、理学系学生が原子力にどのように期待され、自らの役割や原子力への興味を引き出すことができた。
・発電所内で放射線管理実習を実施するカリキュラムを構築し、実践することができた。
・平成20年度からの2年間の原子力人材育成プログラムを構築し、放射線取扱主任者に約20名合格することができ、継続的に合格者を輩出することができた。また、本年度は実際に原子力人材育成プログラムに参加した学生が電力会社(これまでは原子力系研究機関や原子力系企業)へ内定することができ、原子力人材育成プログラムの効果が出つつあることが示された。
・今後は本プログラムで構築したカリキュラムを精査し、この取り組みを継続するとともに、原子力への興味をさらに引き出したい。
・また、放射線取扱主任者試験に合格した学生に対して原子力業界への興味を引き出すために、主任者試験合格者に対して世界的視野に立ったエネルギー・原子力・放射線の問題とその解決への取り組みに対する教育・研究を奨励し、次代を担う原子力人材の育成に努めたい。

5. 添付資料

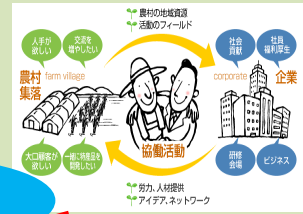
1)放射線管理実習テキスト、静岡大学理学部編

6. 文献

1)日本原子力学会編: 原子力がひらく世紀(東京印書館、東京、1998)。

連絡先: 静岡大学理学部附属放射線科学研究施設、大矢恭久

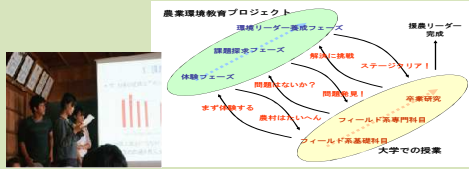
現代GP(現代的教育ニーズ取組支援プログラム) 静岡市中山間地域における農業活性化 ～「一社一村しずおか運動」に連結する農業環境教育プロジェクト～



【概要】

過疎村が抱える問題の解決のために、静岡県は全国に先駆けて「一社一村しずおか運動」を展開しています。このプロジェクトでは静岡大学が一社となり、静岡市梅ヶ島大代地区と連携します。学生は大代地区で農村生活や農作業の体験を通して中山間地域の問題を学びます。3年間で30日以上農村体験を通して、農村生活のたいへんさと豊かさを肌で感じながら、農作業や地区住民との話しの中から課題を見出ししていきます。

一方の大代地区では、若い学生が定期的に来ることで、世代を越えた交流が活発となり、活気がでてきました。地区の人たちは、学生が社会に出たときこの農村体験を生かして、さまざまな場面で活躍してくれることを望んでいます。この農業環境教育プロジェクトは、平成19年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」として文部科学省により選定されました。



【農業環境教育プロジェクトの内容】

- I 体験フェーズ
1年目は大代地区で年間6回10日間の農村体験(うち4回は1泊2日)を行います。
- II 課題探求フェーズ
2年目は1年目と同様の農村体験を継続しながら、一方で学生5〜6名と地区住民とでチームを作り、地区の具体的な問題とその解決法を考えていきます。
- III 環境リーダー養成フェーズ
課題探求フェーズを終了した学生は、農村体験コーディネーターとして体験フェーズや課題探求フェーズの学生にアドバイスをを行い、地区住民とのコミュニケーションの手助けをします。また、課題探求フェーズで自らが提案した問題解決策の実施を試みます。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回
1年目 体験フェーズ											
7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回
2年目 課題探求フェーズ											
13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回	21回	22回	23回	24回
3年目 環境リーダー養成フェーズ											

＜農業環境教育プロジェクトにおける大代地区訪問日程＞



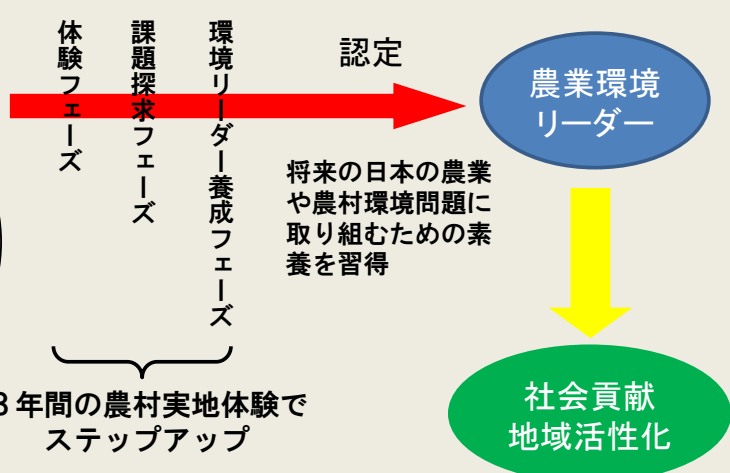
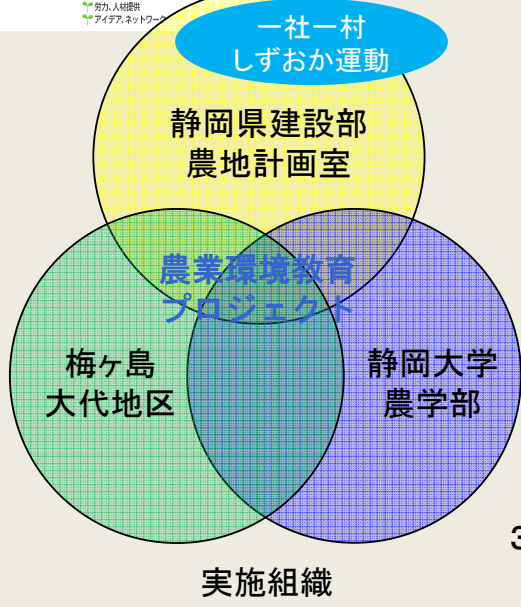
【農業環境リーダーとは？】
日本の農村では過疎化や高齢化が進み、さまざまな問題が起っています。3年間の農村体験学習で、これらの問題を肌で感じ、地区住民の目線で課題を捉えながら、将来の日本の農業や農村環境に関する問題に取り組むための素養を育てていきます。その素養を身に着けた学生に、農業環境リーダーの称号を授与します。

現代GP(現代的教育ニーズ取組支援プログラム) 静岡市中山間地域における農業活性化 ～「一社一村しずおか運動」に連結する農業環境教育プロジェクト～



4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回
1年目 体験フェーズ											
7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回
2年目 課題探求フェーズ											
13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回	21回	22回	23回	24回
3年目 環境リーダー養成フェーズ											

＜農業環境教育プロジェクトにおける大代地区訪問日程＞



将来の日本の農業や農村環境問題に取り組むための素養を習得

3年間の農村実地体験で
ステップアップ

静岡大学教職大学院の特色

連携

融合

共同

①三者連携型実習

実習校、参加大学院生、教職大学院間の緊密な連携による実習。



授業参観



滞在型実習



校内研修に参加し共に課題を考える

②授業・指導体制

すべての授業・実習科目を研究者教員と実務家教員とが共同して担当。



学習成果の相互発表

実 習

開設科目



③理論と実践の融合

全員が実習必修とすることで実習経験を授業材料に。また、様々な学校種で横断的に実習経験を蓄積。



TT 授業の実践

④科目間の接続

共通科目・選択科目・実習科目間の緊密な連携。



授業観察をもとに良さと課題を整理



ICTを活用した学習活動

⑤大学院生同士の共同学習

現職・学卒大学院生間の豊富な共同学習経験に基づき、視野の拡大と新たな視点獲得の機会を提供。



グループ学習を中心とした学習活動

文部科学省大学院GP(H20~22年度)
マニフェストに基づく実践的IT人材の育成

静岡大学 情報学研究科修士課程情報学専攻
自然系教育部博士課程情報科学専攻

目的:実践的5力IT人材の育成

キャリアデザイン力

組織運営力

実践的
5力

国際適応力

基礎学力

研究力

手段

研究科マニフェスト・学生マニフェストを
中核にして、目標を達する

取組活動

国内外インターンシップ
学生マニフェスト作成支援
修士・博士研究段階支援
入学時合宿研修・キャリア支援
ジュニアRA・RA制度
学生自主活動支援

評価活動

アドバイザリー会議・公開フォーラム
学生アンケート

教員

実施

指針・選択

学生

学生マニフェスト
(私のマニフェスト)

研究科マニフェスト

目的・目標
カリキュラムマップ
履修モデル
主な就職先
コンピテンシーマップ
就職後のコンピテンシ
活用例

要求・参加

助言・評価

アドバイザリー会議

実施体制

アドミッション・ポリシーの変化

平成 20 年度以前

静岡大学の「アドミッション・ポリシー(求める学生像)」

静岡大学は、社会の様々な分野でリーダーとして活躍でき、多角的な視野を持って 21 世紀の解決すべき問題を追求し続ける人間性豊かな人材の育成を目指します。そのために、基礎学力の上に立った高い専門性と豊かな国際感覚を身に付け、アジアをはじめ諸外国との関わりのもとで活躍できる次のような学生を広く国内外から受け入れます。

- 1 主体的で旺盛な学習意欲を持ち、新しい課題に積極的に取り組もうとする人
- 2 対人コミュニケーションを培い、異なる考え方や文化を尊重する人
- 3 進取の気性に富み、独創的能力を秘めた人
- 4 文化、社会、自然に対する知的好奇心や関心を持つ人

◆人文学部

- 1 人間の社会的あり方や、その文化的営みについて強い関心を持ち、学ぶ意欲を持つ人
- 2 法律や政治、経済に関わる社会的問題に強い関心を持ち、地域社会や国際社会に貢献しようという意欲のある人
- 3 人文科学、社会科学を学ぶ上で必要な適性と基礎学力を有する人

出典：平成 21 年度入学者選抜に関する要項

平成 21 年度以降

静岡大学の「アドミッション・ポリシー(求める学生像)」

【育てる人間像】

静岡大学は、教職員、学生が共に「自由啓発」を基盤として、平和で幸福な「未来創成」をめざします。*このビジョンの下、地球の未来に責任をもち、アジアをはじめ諸外国との関わりをもつ国際的感覚を備え、高い専門性を有し、失敗を恐れないチャレンジ精神にあふれた人格を育成します。こうした人格こそが、社会の様々な分野でリーダーとして、21 世紀の解決すべき問題を追求し続ける豊かな人間性を有する教養人です。

【目指す教育】

感性豊かな知性を育てるために、フィールドワーク、ものづくり体験、地域づくり、子どもと共にそだちあえる学校や地域の場に接する機会を活用します。それによって刺激を受けた人間力を、基礎と応用の分野での学習・研究に反映させます。

【入学を期待する学生像】

失敗を恐れず若々しいチャレンジ精神をもち、人の意見によく耳を傾け、それに学び、協調性豊かに自己主張ができる人の入学を期待します。

◆人文学部

【育てる人間像】

21 世紀の諸問題（地球環境問題、人口爆発と貧困、低開発と不平等、医療・福祉・教育・文化の発展、民族問題、経済社会の持続的成長、人口減少と少子高齢化問題など）に、社会、文化、政治、経済等の分野から取り組むために必要な専門知識と能力を身につけ、国際的な視野と幅広い教養を備え、人類社会の発展に貢献する市民・社会人を育成します。

【目指す教育】

人文社会科学諸分野の専門教育とともに、専門知識を生かして課題発見・問題解決する能力を育成するフィールドワーク教育（体験型教育）を行います。

【入学を期待する学生像】

人類社会が共に抱える諸問題に関心をもち、人文社会科学に対する学習意欲と、そのための基礎学力を有する人の入学を期待します。

出典：平成 22 年度入学者選抜に関する要項

1 大学入試センター試験を課さない推薦入試 1-(3)

〔教育学部 2/3〕

学 部	教育学部
課程・専攻等	学校教育教員養成課程
	(全専攻・専修)
募集人員	教員養成特別枠 10名
出願期間	平成21年11月2日(月)から平成21年11月9日(月)まで 《最終日の午後5時までの必着に限ります。》
選抜期日	平成21年11月28日(土)
選抜方法等	1 志願者全員に面接(個別面接。志願者数によっては、集団面接に変更することがあります。)と小論文を課します。 2 1の結果により選抜します。
配 点	合計500(面接300, 小論文200)
選 抜 方 針	主に意欲, 表現力, 論理的思考力等を中心に総合的に判断します。
出 願 要 件	平成22年3月高等学校卒業見込みの人
	次の各項目に該当し, 学力・人物が優れ, 志願する専攻・専修への能力・適性等について, 学校長が責任を持って推薦できる人 1 学校教員になろうとする強い意欲を持つ人 2 高等学校における学習成績概評がA段階以上の人
対象となる学校 及び 推薦できる人数	高等学校1校につき2名以内
備 考	1. 学校教育教員養成課程のいずれかの専攻・専修を選んで出願します。なお, 出願に際しては, 第2志望まで選択できます。 2. 各専攻・専修の合格者は5名までとします。同一専攻・専修の合格者が5名を超えた場合, 6位以下の志願者は第2志望の合格者とします。 3. 合格者には入学前準備教育を用意します。(内容については45ページを参照してください。)

【注】 国公立大学の推薦入試(大学入試センター試験を課す場合, 課さない場合を含めて)では, 一つの年度における推薦は一つの大学・学部に限ります。

ただし, 教育学部学校教育教員養成課程【教員養成特別枠】の場合は, 「大学入試センター試験を課さない推薦入試」を不合格となった場合に限り, 同一の専攻・専修(第一志望に限定)の「大学入試センター試験を課す推薦入試」に出願できます。

■工学部で国立大学初の“秋季入学式”－NIFEEプログラムスタートー

平成21年10月6日（火）に浜松キャンパス佐鳴会館において、NIFEEプログラム履修学生の秋季入学式が行われました。正規の学部学生の秋季入学は、国立大学では初めてのことです。（NIFEE：National InterFacing Engineers Education／NIFEEプログラムの詳細はこちら→（英文）<http://www.eng.shizuoka.ac.jp/english/NifeeTop.html>

今回入学したのは、ベトナムのフエ市から来日した3名で、ホアンさん、グエンさんは電気電子工学科、チュオンさんは物質工学科を専攻。3名とも、本学とフエ市との教育交流協定（平20.11締結）に基づいて推薦・派遣され、入学検定料、入学料、授業料は免除されることになっており、こうした現地自治体（フエ市及びフエ省）との学部留学生の派遣協定についても、国内では初の取り組みです。

式では、まず、ご臨席賜りました、本学との結びつきが強い地元有力企業の方々、本学のフエ連絡事務所設置をはじめ、このたびのNIFEEプログラムによる学生受入れにあたり、現地でご尽力いただいた、「ベトナムの『子どもの家』を支える会」代表小山道夫様、同じく秋季入学導入にご尽力いただきました、本学の前学務部長で、現金沢大学学生部長の車谷芳隆様が紹介されました。



続いて、興学長から、ホアンさんら3名に対して入学が許可され、式辞では、「豊かな自然に恵まれ、歴史的な文化の集積もあるこの静岡の地で、静岡と浜松の両キャンパスの友人たちと、こうした静岡の自然や文化に浸り、広くつながりあった人間関係を形成しつつ、大きな夢を描き、その成就に向けて、チャレンジしていくことを期待しています。」と、3人へのメッセージが贈られました。

最後に、入学生宣誓が行われ、ホアンさん、チュオンさんから日本語で、これからの就学への決意が述べられました。（グエンさんは体調を損ね、欠席されました）

なお、式には、同国から本学に留学中の学生も多数列席され、二人の様子を見守りました。また、入学式に続いて、工学部会議室において、新入生と来賓の方々、工学部教員、在学学生を交えて、懇談会が開催されました。

（2009.10.6 総務部総務・企画チーム）



▲入学生宣誓

▼入学式会場内



2009年8月7日から13日まで、「ベトナムに学ぶ」の現地実習と引率担当者としてフェエ市に行きました。なお、国名表記は「ヴエトナム」がより正確と思いますが、一般的に用いる「ベトナム」とします。

シラバスでは当初15名定員で履修受付をして16名の登録があったものの、実際に参加したのは、人文・理・工・農の2～3年生12名でした。定員15名としたのは、受入側および引率のキャパシティの点からです。

教養科目である学際科目として、講義と実習を合わせた講義形態をとる授業は初めてであるばかりか、授業のほとんどを外国で実施したことも最初のことです。



(後ろ向きの方が小山先生)

このような異例ずくめの授業をなぜ企画・実施したのか、まずは開講の経緯から紹介しましょう。

1) 9月入学制度導入との相対(あいたい)としての企画

2009年度9月に、工学部は新入学制度を実施し、現に3名の学生がベトナムのフェエからやって来ます。受け入れるだけでなく、静岡大学からも相手国に出かけて行ってその国のことを学ぶ講義が開設できないかと、車谷前学務部長から計画を打診されたのが、昨年秋のことだったと記憶しています。そのとき、9月入学制度との相対企画として文科省へ説明するため、大学執行部からの要請でもあったと伺いました。

本学の学生達が東南アジアから、しかも現地に出かけて行って学ぶ意義は大いにあると思ひ、さっそく開設のための準備にとりかかりました。そのときのわたしの想ひは、こうした科目を通じて学生間の相互交流を少しでも促進し、併せて学生の国際感覚を養う機会となるのではないかとこの点です。なぜベトナムなのかという点ですが、同国フェエ市には9月入学制度実施のために本学の連絡事務所がすでに開設されており、受入体制があったということが決め手でした。こうして、所長である小山道夫さんが来校されたとき、科目の目的と講義や実習の内容等を協議して、以下に紹介する授業内容の骨子を作成しました。

○ 学際科目「ベトナムに学ぶ」実施案

- 1 2009年度(平成21年度)前期 夏期集中開講(2009/8/7~8/13)
- 2 科目責任者 芳賀 直哉
- 3 科目担当者 芳賀(授業ガイダンス、ベトナム現代小史、現地フィールドワーク) 小山道夫(非常勤講師)14時間 (ベトナム語初歩のほか、現代ベトナムの教育制度、福祉制度、平和問題等の講義)
- 4 履修対象学生 人・教・情・理・工・農2~3年生 計15名 (希望者多数の場合は履修志望レポートをもとに選抜)
- 5 授業の目標・ねらい
アジアに対する関心をもつ学生が、アジアの1国であり、近年日本との関係が急速に強まっているベトナムを訪れ、ベトナム戦争体験者からの聞き取り調査や山岳少数民族との1日交流をはじめ、現代のベトナムの抱えるさまざまな問題を現地フィールドワークおよび講義を通して主体的に学び、平和について考えるときともに、国際的感覚を身に付けることを目的とする。
- 6 具体的な授業計画
1 授業ガイダンス(4月16日) 芳賀
現地でフィールドワークの詳細等の説明、現代ベトナムの歴史と文化(入門編)
<8/7 出発、8/8~8/12 現地で学習、8/13 帰国>
2~3 ベトナム語初歩の学習 小山
4~8 現代ベトナムの政治経済、社会保障制度、教育制度、農業事情等 小山
9~15 フェエ市およびその近郊でのフィールドワーク、施設見学、交流 芳賀
(子供の家庭訪問・交流、日本語学科の大学生との交流、ベトナム戦争体験者へのインタビュー、近郊農村への訪問、山岳少数民族との交流等)
- 7 成績評価の方法と基準
成績は、現代ベトナム事情に関するレポートおよびフィールドワーク報告書の内容で評価する。授業の性格上、全日程の参加を必須とする。
- 8 教科書・参考書 4月の第一回目の授業ガイダンスのときに紹介する。
- 9 その他
(講義と実習の複合授業における授業時間数)
1~8までの授業時間(講義)は16時間の学修をもって充て、9~15までの授業時間(フィールドワーク)は28時間の実習をもって充てる。
(渡航費用および現地で1週間にかかる滞在費用)
自己負担とする。 約12万円程度(詳細は初回授業のときに説明)

以上から、この授業の目的や性格はある程度理解していただけるかと思ひます。わたしとしては、<ベトナムを見る>とか<ベトナムを学ぶ>というように、その国を視察の対象としてとらえるのではなく、あくまでその国から学ぶという姿勢を明確にしたいと考えたわけでした。

2) 古都フェエでの学習

シラバスに示した学習項目のうち、もっとも重点を置いたものが2つありました。それは、ベトナム戦争体験者による証言と山岳少数民族との交流です。わたしたちが滞在したベトナム中部のグエン王朝の都であった古都フェエは、戦争時は南ベトナムの都市でしたが、北との国境に近く戦略上の要衝の地でした。そのため、ここは北ベトナム軍や南ベトナム解放戦線(ベトコン)に協力して南ベトナム政府軍やアメリカ軍と闘った多くの農民・市民がいました。戦争当時若者だった方達も現在60才前後になっており、人口に若者が占める率の高いベトナムにおいて今や小部隊で、戦争体験を語る機会もほとんどないのが現状だそうです。そうした方達3名が若い日本の学生達に、自らの当時の想ひを語ってくれました。

下の写真にあるように、男性2人は農民出身の解放戦線の軍人で、現在は地区の共産

党委員長および副委員長という要職にある方々です。もうひとりの女性は当時学生で前線と市街地の情報伝達を担ひ、現在は「こどもの家」の所長をなさっています。両親が殺されたことから戦闘に参加したこと、投獄され拷問を受けたこと、摘発の危険を顧みず米軍展開場所の情報等を山岳地域に潜むゲリラ軍に伝達した経験を語ってくれました。もとより私たちはベトナム語がわからないので、通訳のパオ・ミンさんを通しての理解でした。



(写真右手の立っている方が地区委員長、その右の座っている方が副委員長、中央の女性が「こどもの家」所長のセンさん、その左の立っている男性が通訳のミンさん、左端が小山氏)

3) 少数民族との交流

ベトナムではキン族が多数派で、全人口の85%ほどを占めています。南北に長い国土の山岳地帯には、20ほどの少数民族が存在します。反政府活動を煽動することを危惧する政府は、外国人との接触を認めていないとのことですが、今回は小山さんの紹介で訪問が実現しました。私たちはフェエから車で3時間ほどのところに200世帯ほどが生活している少数民族と交流することができました。伝統衣装を身にまとった娘さんや青年たちによる舞踊への返礼として、こちらからはよきこいソーラン踊りを学生2人が披露しました。また、綱引きや縄跳びに大勢が楽しく参加した後で、自家製の焼酎と料理で歓迎の小宴を催してくれました。4時間ほどたのしく交流して、なごりを惜みつつ帰途につきました。



4) 継続するための課題

外国に行つて学ぶという科目の性格上、学生には飛行機代と宿泊費用を負担してもらわなければならないという問題はありますが、これは当面やむを得ないでしょう。時間的に航空運賃が高く、学生達には予定費用を若干超える負担となつてしまったことは申し訳なく思っています。しかし、今後、ベトナムに限らず、やはり本学の連絡事務所が設置されたタイやインドネシア、あるいはその他のアジア諸国に出かけていき、現地で学ぶ授業が企画・実施されることを期待しています。継続するのであれば、改善しなければならない課題はあるものの、このような科目開設のものは大いに意義があると思うからです。

しかし、企画し科目責任者として体験した者から忌憚なく言わせてもらうなら、9月入学の導入との相対として全学をあげて推進した(とわたしは了解したからこそ開設した)のであれば、学生の送り出しに責任を負う部署の関与が全くなかったことは極めて遺憾です。本科目に対する執行部レベルでの確認と支援、さらには支援事務の指揮命令系統の確認が不可欠と思ひます。今夏の実施が最初で最後とならないために、全学的取組をお願いするものです。

$$\left. \begin{array}{c} 20.5.21 \\ \text{役員会決定} \\ 21.6.26 \\ \text{役員会一部改正} \end{array} \right\}$$

人件費削減計画及び教員の戦略的配置について

1. 教員人事管理及び人件費削減に関する基本方針

- (1) 政府における総人件費改革の実行計画を踏まえた本学の中期目標・計画における人件費削減を適切に実行するため、教員（附属学校園は除く。）については、これまでの定員管理方式を人件費管理方式（部局管理責任体制）とする。
- (2) 人件費削減は、2. の23年度までの人件費削減計画に示す削減率により対応する。
- (3) 平成24年度以降については、政府方針等（運営費交付金の配分方針等）の今後の動向を踏まえて対応する。

2. 平成23年度までの人件費削減計画

- (1) 平成23年度までの削減計画は、平成18年度の給与支給実績及び標準配分定数により算出した人件費をベース（削減ベースと称する）として、以下のとおりとする。（別紙1参照）

○削減ベースに対する各年度の削減率(%)

区 分	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
教 員	1. 2 3	4. 2 7	6. 4 1	7. 6 5
附 属 教 員	1. 2 3	2. 2 7	4. 4 1	5. 6 5
事務職員等	1. 2 3	2. 2 7	4. 4 1	5. 6 5

注1) 教員の平成21～23年度削減率には、戦略的配置のための拠出分(2%)を含む。

注2) 附属教員の削減の取扱いについては、別途措置することとする。

- (2) 削減率の算定方法は次によるものとする。

$$\left[1 - \frac{\text{削減目標} - (\text{役員分} + \text{地域調整手当} + \text{昇給分})}{(\text{削減ベース}) - \text{役員分}} \right] \times 100$$

3. 教員の人件費管理及び戦略的配置について

(1) 学長管理

- 1) 全学的視点から、戦略的な配置が必要な組織・ポストに活用するため、教員人件費の2%を確保する。
- 2) 具体的な運用については、当面、「人事制度改革WG」の検討を踏まえて行うものとする。なお、必要に応じて、年俸制による採用等、弾力的な運用が図れるものとする。

(2) 部局管理

- 1) 各部局には、毎年度、削減ベースから削減率を乗じた額を除いたものを人件費枠として配分する。（別紙2）
- 2) 各部局は、配分される人件費枠の範囲内で「教員の人事方針等（ガイドライン）について」（H20.3.19 教育研究評議会了承）の趣旨を踏まえ、別紙3の職別・年代別・採用月別支給見込額を参考に、各年度の教員人事方針・計画を策定するものとする。
- 3) 各部局は、配分される人件費枠内において、非常勤講師の活用等、戦略的かつ弾力的な運用が図れるものとする。
 なお、非常勤講師の活用について、平成20年度においては、大学教育センターで管理されているものとは別に、欠員教員に係る教育の補完等に活用できるものとする。
 平成21年度以降については、大学教育センターで一括管理されている非常勤講師枠のうち、部局専門科目については部局管理とすることを視野に入れた検討を行うこととし、その結果を踏まえて、あらためて運用指針を示すものとする。
- 4) 別紙3を基に算出した、部局毎の在職教員全員の支給見込み合計が、配分される人件費枠を超過する部局にあっては、その取扱について学長と個別協議するものとする。

学生生活実態調査報告書



静岡大学

目次

I 調査概要		V 心身の健康について	
調査の概要	2	あなたの心身の健康状況	81
所属	2	過去1年間の病気・怪我の状況	82
学年	2	日常生活で悩んでいること	83
出身地	2	悩みの相談相手	85
留学生の区分	2	大学のカウンセラーの認知度	86
性別	2	心療内科・精神科への通院について	89
		ハラスメントについて	91
II 生活環境について		VI 卒業後の進路について	
あなたの現在の居住地	4	卒業後の希望進路	93
住居の形態	5	進路の希望職種	94
主な通学方法	6	就職・進学希望地	95
通学時間	7	就職・進学についての不安	96
毎日の食事について	8		
喫煙	12		
飲酒	13		
III 収入・支出・アルバイト		VII その他の学生生活	
家計支援者の年間収入	15	加入しているサークル・部活	100
1ヶ月の支出	16	入学後のボランティア活動	104
主な収入	17		
現在の経済状況	18	VIII その他のクロス集計	106
半年前とくらべた現在の経済状況の変化	19		
奨学金の希望	23	IX 記述解答欄 【要望欄】	140
家計の急変による授業料免除制度	25		
アルバイト	27	X 調査票	160
小遣いで毎月最もお金をかけるもの	43		
IV 学業・学内生活について			
本学を進学先とした目的・動機	45		
本学に入学した満足度	57		
1週間の登校日数	59		
大学構内にいる1日の平均時間	60		
授業の出席状況	61		
授業を欠席する主な理由	63		
授業の理解度	65		
授業内容の満足度	67		
授業・研究時間以外に過ごす構内の場所	69		
授業時間以外の1日の平均勉学時間	70		
本学の図書館の利用頻度	71		
学内施設の満足度	73		
構内環境の満足度	74		
大学の授業以外のスクール・専門学校	75		



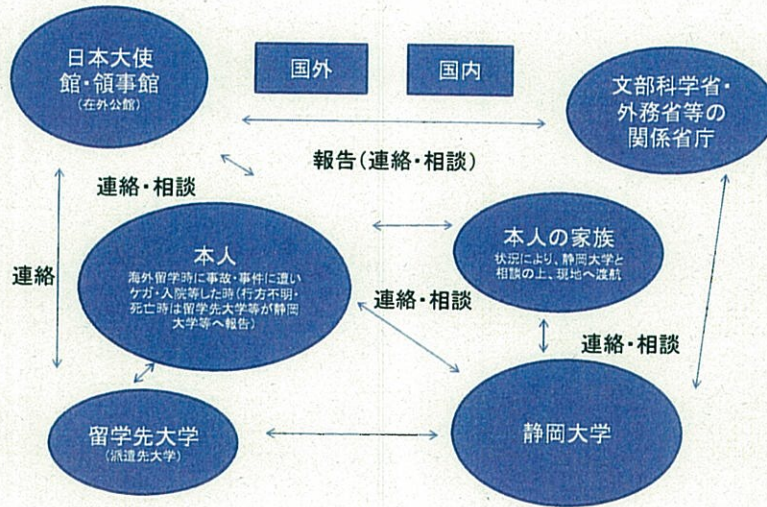
静岡大学国際交流センター・ 国際交流等に伴う危機管理対応マニュアル

平成 21 年 8 月

別表 2 海外留学時等の危機管理対応体制

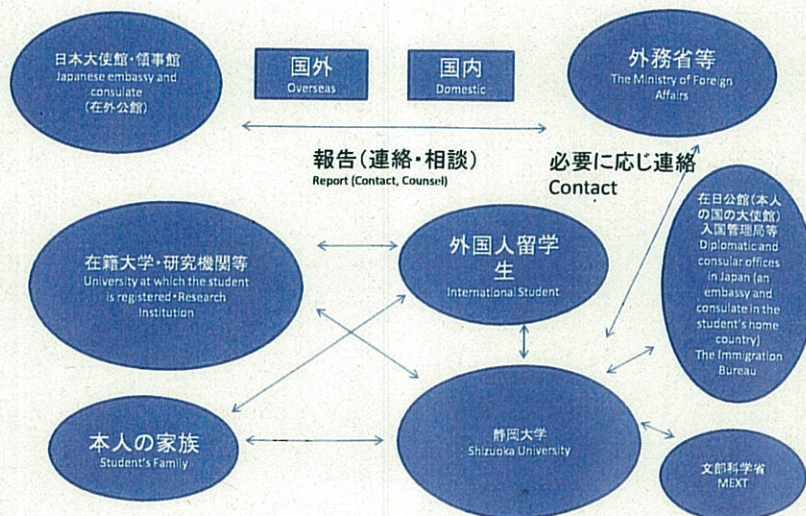
「留学・研修先などで事件・事故等が発生した場合の連絡網の体制」(国外連絡網)

海外留学時等の危機管理対応体制



別表 3 外国人留学生に対する危機管理対応体制 (国内・学外連絡網)

外国人留学生等に対する危機管理対応体制 (国内・学外連絡網)



浜松・東三河地域における産学官連携拠点の整備に関する計画書（概要）

拠点名	光・電子技術イノベーション創出拠点
拠点の種類	地域中核産学官連携拠点
提案機関	産<経済団体> 浜松商工会議所 豊橋商工会議所
	学<大学> 静岡大学 豊橋技術科学大学 浜松医科大学 光産業創成大学院大学
	官<自治体> 静岡県 浜松市 豊橋市
調整機関	(財)浜松地域テクノポリス推進機構
協力機関	静岡県立大学 静岡理科大学 (株)サイエンス・クリエイト

◆産学官連携拠点の全体構想

要約：地域の産学官連携拠点として、本申請の各提案機関と関連する地域内外のネットワークで構成される**“光・電子技術イノベーション創出拠点 (Opt-electronics Technology Innovation Eco-Core)”**を構築し、浜松・東三河地域（以下、「本地域」という。）産学官連携の推進拠点とする。この拠点は、本地域の資源の一つでもある気風（革新的気質）と、そこから生まれる革新的製造技術を用い、光・電子技術 (Opt-electronics Technology) をコアとして、中長期的に展開する。そして、本地域全体の工業、農業、水産業、食品産業、環境産業について独自の付加価値を有する製品化事業への波及を促す。特に、独自に創られる光・電子関連技術を展開し、新産業形成を行うため農商工連携、医工連携、人材育成活動を開始し、新農業、健康・医療関連産業、輸送機器用次世代技術産業、光エネルギー産業の結実に向けた重点的支援を行う。

◆産学官連携拠点形成の背景

浜松市を中心とする静岡県西部（浜松地域）と、県境を挟んで隣接する豊橋市を中心とした愛知県東部（東三河地域）の全製造品出荷額は14.5兆円を超え、農業生産額も約3千億円と、規模・内容・品質ともに全国トップクラスに位置している（図1.2）。

本地域は世界に冠たる日本のものづくり発祥の地でもあり、産業構造は日本の産業都市の典型となっている。本地域の産業集積は自動車やオートバイ、工作機械等の輸送用機器関連産業が全製造品出荷額の過半を占めるとともに、楽器、繊維、農林水産業等も非常に盛んである。また、近年、光・電子関連技術などの国際優位性のある先端技術産業の成長・発展が著しい。

一方、本地域は自動車産業のマザー工場の国内外移転、これに伴う下請けピラミッド構造の弱体化、グローバル経済の活性化低下によって、輸送用機器産業を主とする産業集積が急速に衰退しつつあり、新技術・新産業を創出し、その過程で既存企業の革新と転換を図る必要がある。

◆産学官連携拠点の推進構想

このような危機に際し、自治体では、地場産業の特徴を活かした都市構想を策定し、産業支援機能等も充実を図ってきた。しかし、本地域の多くの産・学・官の連携のための組織は、各々の機能での1対1の連携が主であり、これらの有機的な一体的連携が望まれ、下記のような取組みの必要性が求められて来た（図3）。

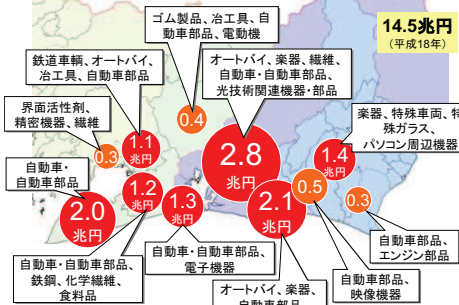


図1: 浜松・東三河地域の製造品出荷額

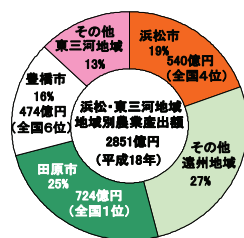


図2: 浜松・東三河地域の農業産出額

戦略①: ニーズと融合するコーディネート
【自立と広域展開への支援エコシステム】
戦略②: ビジネス開発プロデューサー育成
【コーディネーターインターンエコシステム】

目的①: 地域産業政策の具現化
目的②: 地域企業のネットワーク強化
→ イノベーションサイクルへ

2つのエコシステムによるイノベーションサイクル:

産業の裾野を広げて中小企業を含めた重層的産業構造が形成され、時代が求める主力産業を革新してきたことが本地域の特徴である。地域特性を活かしつつ、大企業ピラミッドからの脱出を図る中小企業への新技術開発支援と人材育成による基盤技術の高度化、スピノフ企業、ベンチャー企業への経営支援を行う。(図4) そのために、①自立と広域展開への支援エコシステム②コーディネーターインターンエコシステムによってイノベーションサイクル(図5)を加速させる。

3年後: 提案機関の産学官は、中小企業とスピノフ企業、ベンチャー企業に対しネットワーク形成とブランド化を支援する。新しい地域イノベーションを形成する拠点機能を整備し、特にベンチャーの成長までの実務支援 (Spin-On) とコア企業、ハブ企業を育成する人材育成を行う。

5年後: 大学「学」と自治体「官」は、中小企業の中のコア企業、ハブ企業を中心とした本地域の『産業データベース』を作成・活用し、新産業の発現を支援する。商工会議所「産」は、この成果から、ベンチャー企業、大企業からのスピノフ企業を支援し有望企業による産業クラスターを確立する。知的クラスターに代表される研究機関の成果は、新産業を形成する産業クラスターと食農産業クラスターの参画企業に対しファンディング等の財政支援と異分野融合コーディネートを行って技術移転を行う。

10年後: 地域イノベーションを担う新たな企業やネットワークが生まれ、新たな産業の創出から、特徴的なイノベーションサイクルが形成される。先端光・電子技術を展開するコア企業、ハブ企業の産業基盤となる製品開発と、それらを中心とする有機的ネットワークの形成により、イノベーションサイクルが持続的に展開され、「輸送機器関連次世代技術産業」、「光エネルギー産業」、「新農業」、「健康・医療関連産業」のフィールドにおいて、産学官の連携による新産業が連鎖的に創出が期待される。

理科離れ対策: 次世代を担う卓越した研究者、技術者、指導者を養成し、30年後に本地域からノーベル賞、フィールズ賞受賞者を生み出すことを目的として、卓越した人材を育成するための教育システムを地域の総合力で構築する。

◆産学官連携拠点の実施体制

本地域（浜松・東三河）で実施している「知的クラスター創成事業」、「産業クラスター計画」、「食農産業クラスター」、「戦略展開プログラム“東海iNET”」を担ってきた本申請の各提案機関が光・電子技術イノベーション創出拠点の中心となり、積極的に運営に参画して有機的な産学官連携を進める。調整機関の(財)浜松地域テクノポリス推進機構は、提案機関を中心に構成する「産学官ネットワーク協議会」のコミットメントに基づいて企画・調整等を行い、産業構造改革へのプロセスを進める。

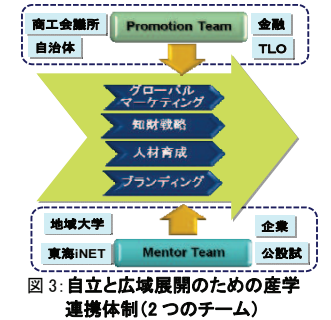


図3: 自立と広域展開のための産学連携体制(2つのチーム)

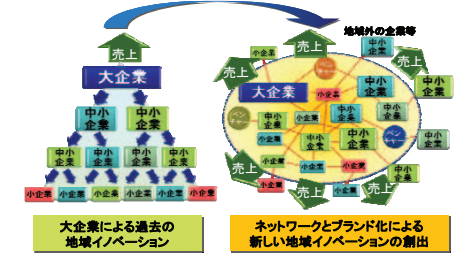


図4: 自立と広域展開への「支援エコシステム」



図5: 光・電子技術イノベーション創出エコシステム

「True Nano」を実現する21世紀先端プラズマ 科学技術研究基盤創出事業（平成19~21年度）

True Nano研究領域の創生および産業イノベーションの創出

ナノスケール放電場による
超微細材料プロセス

プラズマ-分子ナノスケール
反応場によるバイオプロセス

超微細プロセス
技術
超微細エッチング
ナノ領域CVDなど

ナノ構造
デバイス創製
ナノチューブ、
ナノ光学素子、
ナノ磁性体など

バイオマテリアル
ナノプロセス技術
親水性、撥水性、
表面化学修飾など

ナノスケール
分子創製技術
新規ナノ分子、
タンパク質改質、
医療材料など

電子工学
研究所

工学部

解析装置
・STM

理学部

農学部
浜医大

先端プラズマ科学による
ナノスケール反応場の創生

創造科学技術大学院

解析装置
・TEM
・SEM
・AFM

解析装置
・XPS
・TOF-MS
・NMR

新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業
 「キノコ中の急性脳症原因物質の特定と発症機序の解明及び検出法の開発」
 (21年度 30,000千円, 22年度 23,770千円, 23年度 未定)

背景

- ・スギヒラタケによる急性脳症
- ・原因未解明

既往成果

複数の分子の作用による脳組織の異変を確認(動物実験)

目的

- ・スギヒラタケ中の有害物質の特定
- ・急性脳症発症機序の解明
- ・有害物質の検出技術の開発と各種キノコの安全性確認



内容

スギヒラタケ中の有害物質の特定

有害物質の構造決定・クローニング・組替え体発現(静岡大学)

有害物質の複合体形成機構解明(静岡大学)

毒性発現の合成化学的検討(静岡県立大学)

人工栽培技術の開発・各種ストレス下での栽培(宮城県林業技術総合センター)

発症機序の解明

毒性発現機構解明の細胞レベルでの検討(山梨大学)

毒性の組織学的検討(東京都神経科学総合研究所)

毒性発現機構の動物実験による検討(静岡大学)

毒性物質の体内動態(大阪大学)

有害物質検出法の開発と各種キノコの安全性確認

毒性物質の検出法開発・各種キノコの安全性確認(静岡大学)

野生・栽培キノコの収集(森林総合研究所)

達成目標

- ・スギヒラタケ中の有害物質の特定
- ・発症機序の解明
- ・有害物質検出法の開発と各種キノコの安全性確認

波及効果

- ・消費者の栽培キノコ類, 野生キノコ類の安全・信頼の確保
- ・国民の健全な食生活の実現への貢献

JAPANESE [ENGLISH](#)

静岡大学 産学連携

University - industry cooperation, Shizuoka University

教員・研究課題の検索

キーワード

全学部から

準備中

[サイトマップ](#)[紹介 Introduction](#)[共同研究・受託研究 Research](#)[知的財産・技術移転 Patent](#)[ベンチャー支援 Venture support](#)

東海イノベーションネットワーク

[HOME>東海iNET](#)

概要

概要

役割

体制

スタッフ紹介

連絡先

活動報告

東海iNETとは

静岡大学では、平成20年度に文部科学省の産学官連携戦略展開事業(戦略展開プログラム)に採択され、豊橋技術科学大学と共同で「東海イノベーションネットワーク(東海i NET)」の構築を行っています。

東海i NETは、静岡県から愛知県東部に至る地域の産業発展・イノベーション創出のためにバリューチェーンを構築し、地域の参加研究機関が保有する知的財産の産学官連携による活用を支援するものです。

東海i NETでは、地域イノベーション創出のためのネットワーク拠点として、

異分野融合連携

県境を越えた地域連携

国公立大学間連携

事業化支援

産学連携人材育成

に関する活動を行っています。

[PAGE TOP ▲](#)

東海iNETの連携大学等

[PAGE TOP ▲](#)

TOKAI INNOVATION NETWORK

会社概要

名称：静岡技術移転合同会社（略称：静岡TTO）

Shizuoka Technology Transfer Organization L.L.C.

設立：2009年3月

所在地：静岡県浜松市中区城北3丁目5番1号

静岡大学イノベーション共同研究センター内

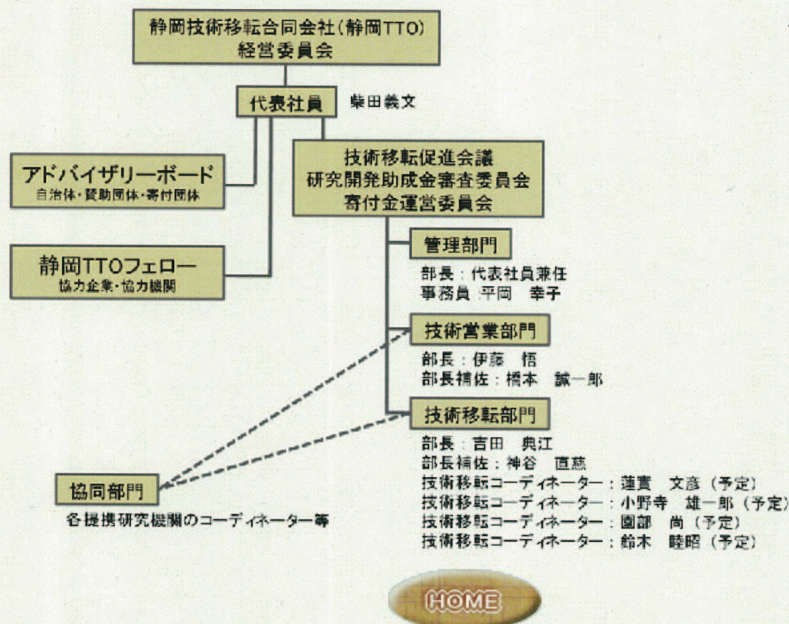
資本金：12万円

代表社員：柴田義文（浜松商工会議所 相談役）

事業概要：提携研究機関等の技術移転など

連絡先：053-478-1708（電話） 053-478-1711（FAX）

組織図



事業内容

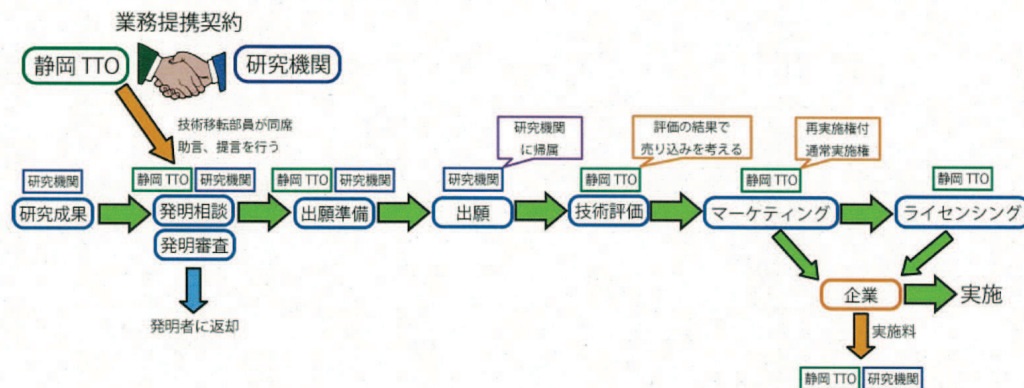
静岡TTOは静岡大学、浜松医科大学、静岡県立大学、静岡理工科大学、沼津高専、国立遺伝学研究所などの研究機関と静岡県、浜松市、静岡市の総意で2009年3月新たに設立された技術移転組織です。今後、承認TLOとなり広域にわたる活動とサービスの提供を充実していきます。

静岡TTOの業務内容

- ・技術移転に関する一連の業務
- ・知財・研究成果などの情報発信
- ・共同研究・受託研究の仲介
- ・静岡TTO 研究開発助成の運用
- ・競争的資金の管理法人業務
- ・大学発ベンチャー企業の知財管理業務
- ・競争的資金の獲得支援業務
- ・講演会、セミナー、研究会、シーズ発表会などの開催
- ・知財人材育成



発明からライセンスまでの流れ



技術評価報告書

技術の定量評価方法については、先進的な大阪大学の事例を参考にして評価項目および評価表を策定しています。評価結果は

静岡大学テニュア・トラック制度の推進体制

研究戦略会議

教育戦略会議

人材システム改革特区

総括責任者：学長

人材システム改革推進本部

本部長：研究・情報担当理事
 構成員：部局長（創造科学技術大学院、電子工学
 研究所、情報学部、理学部、工学部、農学部、人
 文学部、教育学部、法務研究科）

役割：基本方針
 部局間の調整 等

拠点リーダー
 サブリーダー

部局

連携・協力

人材システム
 検討委員会
 （学外の国際的な
 専門家を含む）

役割：
 各審査基準の策定。
 テニュア・トラック制
 度全般についての
 評価・改善方策の
 立案 等

テニュア審査委員会※

役割：
 テニュアトラック教員の公募、審査、年次評価、
 テニュア教員の採用審査 等

専門委員会A※

専門委員会B※

…案件ごとに
 設置

※学外の国際的な専門家を含む

アドバイザリー
 委員会

メンター
 アドバイザー

指導・助言

相談

若手研究
 者支援室

拠点

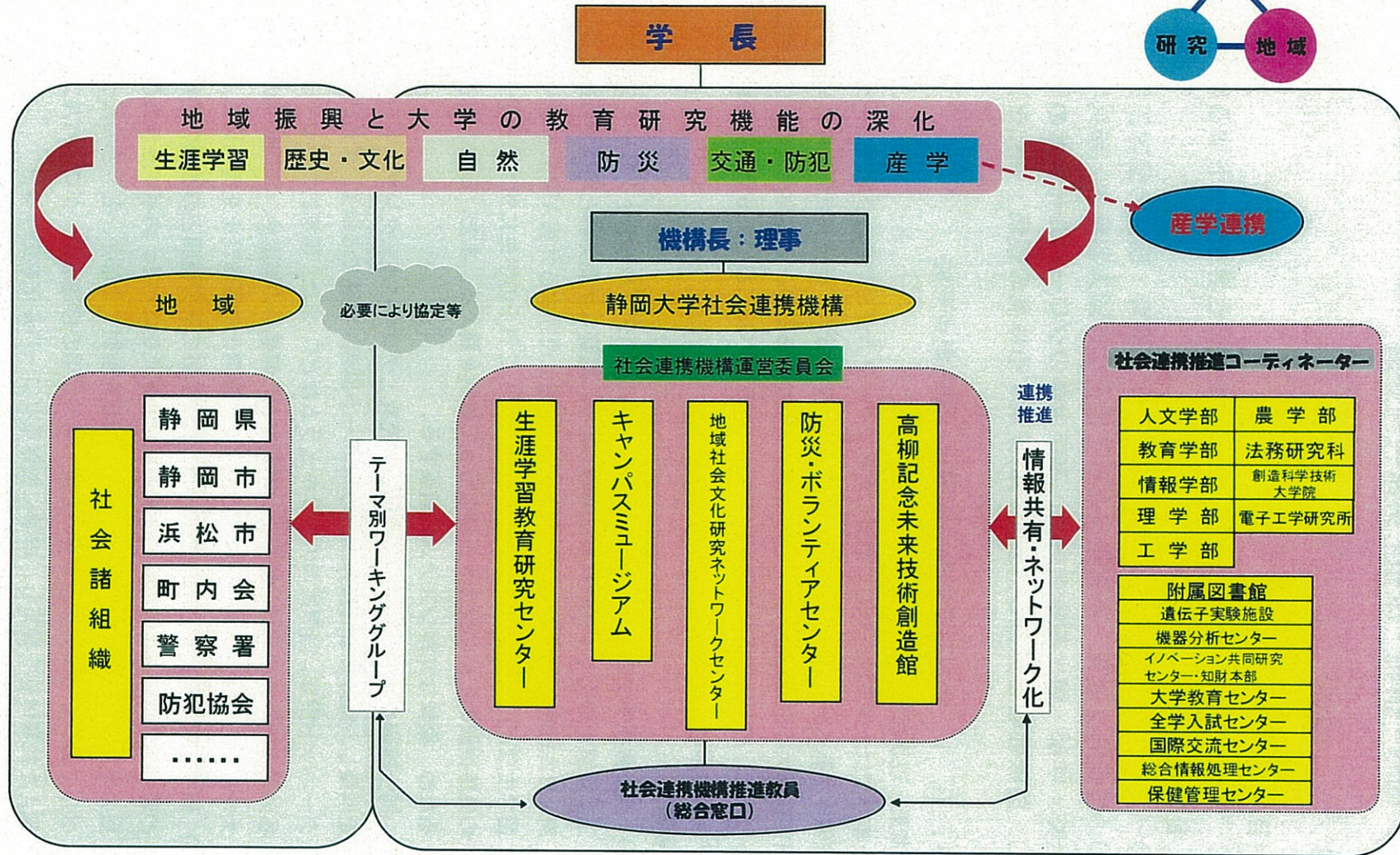
若手研究者（テニュア・トラック）

サポート

国際交流
 センター

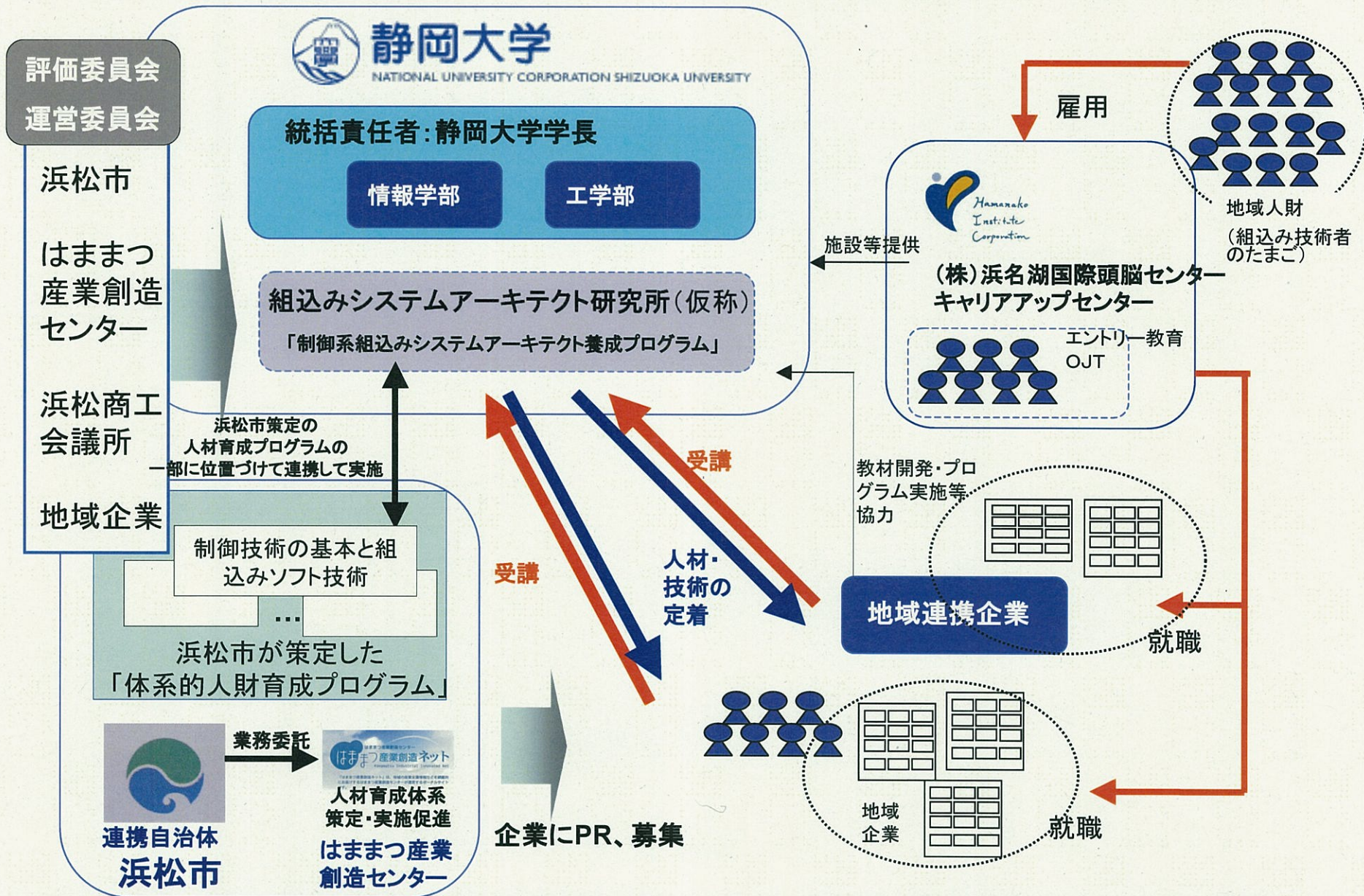
静岡大学社会連携協働システム

静岡大学
知のトライアングル



「地域再生人材創出拠点の形成」

「制御系組込みシステムアーキテクト養成プログラム」実施体制



地域食品産業の安全と安心を支える実務型分析オペレータ育成のための再教育プログラムの開発・実証

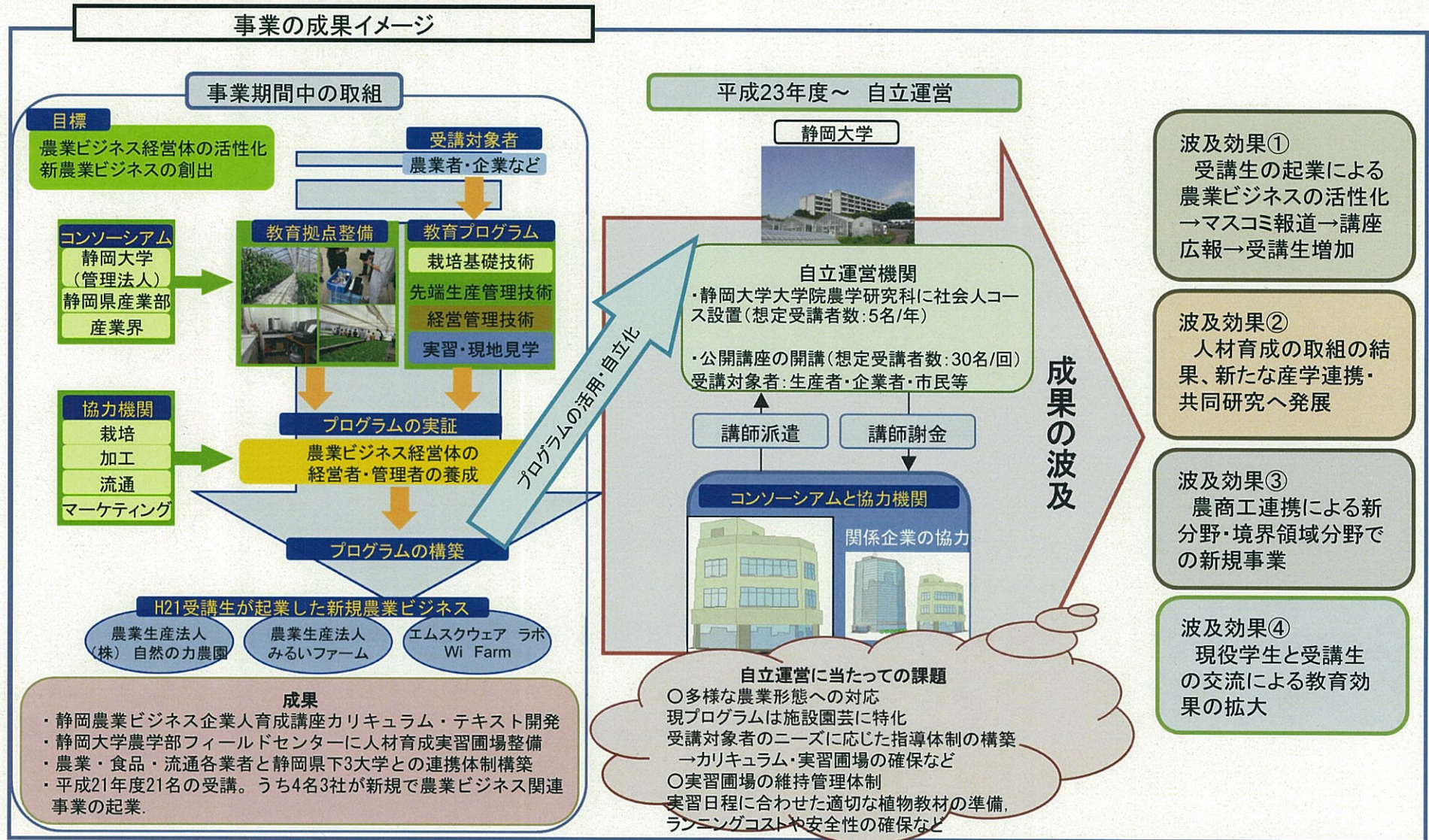
20年度：9,640千円、21年度：14,125千円、22年度：11,995千円（申請中）

食の安心・安全を支える「実践型再教育プログラム」を実施することで、受講生の習熟度や目的意識に応じた「学び直し」の機会を提供し、地域食品産業に対処しうる分析技術者を養成する。

事業の成果イメージ



課題山積の第1次産業の活性化に寄与するため、産学官および農商工の連携による企業的な農業ビジネス経営体育成の専門的教育拠点を構築し、新たな農業ビジネスの創出を図る



女子中高生の理系進路選択支援事業

1. 事業の目的

女子中高生の科学技術分野に対する興味・関心を喚起し、理系への進路選択を支援する。

2. 事業委託元機関

平成 20 年度：文部科学省 平成 21 年度：科学技術振興機構（JST）

3. 事業実施機関

静岡大学 工学部・電子工学研究所

4. 事業内容

地域の女子中高生及び保護者、教員を対象に、学内（浜松キャンパス）における講演会や実習教室を開催し、また地元企業の見学会を実施する。これらにより女性の理系進路に関する情報提供を行うとともに、女子中高生と女性研究者・技術者・理系学生との交流の機会を提供する。

・講演会の開催

科学技術分野で活躍する女性研究者・技術者や現役女子大学生による講演会を開催して、科学技術に関する知識や女性の理系進路に関する情報を提供する。

・実習教室の開催

女子中高生が日頃関心を持っている事柄を題材に、その中身を知り自分の手で操作・製作する実習を行う。動作原理とそれを実現する機構を理解することにより、対象の本質をつかむ力を養い、また自ら製作することにより工夫する力を養う。

・企業見学の実施

実習に関連する地元企業を見学することにより、地域ものづくり産業への認識を深める。また企業見学を通じて女性技術者の話を聞き、女性が活躍している現場を直に知ることで、やりがいのある理系人生を実感する。

事業を実施した平成 20 年度、21 年度における具体的な内容の概略を下表に示す。

	平成 20 年度夏	平成 20 年度冬	平成 21 年度夏	平成 21 年度冬
講演・実習	実施日： 8/1(金)～3(日) 学外講演者所属： 浜松ホトニクス 実習テーマ： (A),(B),(C)	実施日： 12/22 (月) 学外講演者所属： 千葉工業大学 実習テーマ： (C)	実施日： 8/8(土)～9(日) 学外講演者所属： 大阪府立産業技 術総合研究所 実習テーマ： (D),(E),(F)	実施日： 12/23(水・祝) 学外講演者所属： 浜松科学館 実習テーマ： (E),(G)
企業見学	実施日・見学先： ・8/5(火) ポーラ化 成工業 袋井工場 ・8/19(火) 浜松ホト ニクス 中央研究 所		実施日・見学先： ・8/27(木) 浜松 ホトニクス 電 子管事業部 ・8/28(金) FDK エナジー, FDK 湖西工場	
参加人数	38 名(中学生 11 名、 高校生 21 名、教諭 3 名、保護者 3 名)	12 名(高校生 8 名、 教諭 3 名、保護者 1 名)	53 名(中学生 26 名、高校生 24 名、 教諭 1 名、保護者 2 名)	11 名(中学生 5 名、高校生 5 名、保 護者 1 名)

実習テーマ：(A) プリクラになって自分を撮ってみよう！ (B) オリジナル携帯電話ストラップを作ろう！
(C) お肌の健康診断：あなたの肌と血管は若い？ (D) マニキュア感覚で薄型テレビをつくろう
(E) ペットボトルを原料に戻そう！ (F) あなたの体温で電気を起こそう！ (G) 光るストラップを作ってみよう

「サイエンスカフェ in 静岡」

No.	日 付	講 師	テ ー マ	来場者数
第16話	平成20年 4月24日(木)	奥野 健二	エネルギーから見る人類の未来は？	58
第17話	平成20年 5月29日(木)	瓜谷 眞裕	生きのびる仕組みについて	99
第18話	平成20年 6月26日(木)	藤井 直之	『東海地震の震源域は今』 ～プレートの蠢きを探る最先端研究～	105
第19話	平成20年 7月31日(木)	宗林 留美	駿河湾深層水ってどんな水？	81
第20話	平成20年 9月25日(木)	村井 久雄	初めに光ありき ～物質、電子、そして光～	92
第21話	平成20年10月23日(木)	伊吹 裕子	「日に焼けると皮がむけるのはなぜ？」 ～紫外線から身を守る精巧なプログラム」	54
第22話	平成20年11月27日(木)	大吉 崇文	「遺伝子の世界とその実力」	79
第23話	平成20年12月18日(木)	天野 豊己	「植物の斑入りと病気に耐えるしくみの共通点」	76
第24話	平成21年 1月29日(木)	青山 昭五	「宇宙の起源への旅～時間と空間とは～」	113
第25話	平成21年 2月19日(木)	道林 克禎	「世界で最も深い深海に挑む～潜水艇しんかい 6500によるマリアナ海溝研究～」	105
春の 特別企画	平成21年 3月25日(水)	瓜谷 眞裕	「プロコリリーから遺伝子をとりに来よう」	71
		道林 克禎	「鉱物の光の性質～方解石を例として～」	
		奥野 健二 大矢 恭久	「自然界の放射線を測ってみよう!!」	
第26話	平成21年 3月26日(木)	菊山 榮	「フェロモンやホルモンにまつわる鼻の話」	98
第27話	平成21年 4月23日(木)	岡島 いづみ	{超臨界流体ー水と二酸化炭素によるリサイクル とものづくり}	121
第28話	平成21年 5月28日(木)	木村 榮一	不思議な形の分子合成ー遊び心と数学と化学の 融合ー	150
第29話	平成21年 6月18日(木)	山下 光司	がんの早期発見・早期治療を目指す医用材料の 開発	93
第30話	平成21年 7月30日(木)	浅芝 秀人	クイパーと圏	110
第31話	平成21年 8月20日(木)	小林 健二	分子のかたちと集合:分子から超分子へ	70
第32話	平成21年 9月17日(木)	平田 久笑	植物の病気ー植物の「かしよう」と「がん化」のしく みー	89
第33話	平成21年10月29日(木)	Beatriz E CASARETO	海のピコ・ナノサイズの植物プランクトンシアノバク テリアの役割に注目!	100
第34話	平成21年11月26日(木)	里村 幹夫	GPSで東海地震の予知を目指す	104
第35話	平成21年12月17日(木)	坂本 健吉	ケイ素の有機化学 ～生活に役立つシリコンの化学～	92
第36話	平成22年 1月28日(木)	相原 惇一	芳香族化合物はなぜ安定か	104
第37話	平成22年 2月19日(金)	木寄 暁子	植物油のはなし	104
第38話	平成22年 3月25日(木)	嘉規 香織	原子核の内部を探る ～マイクロな世界を支配する物理学～	80

静岡大学・読売新聞連続市民講座「人間と環境の現在と未来—21世紀の日本を拓く」

実施状況および来年度の計画について

回	日付	タイトル	講師	参加者
1	5/9	地球温暖化防止と私たちの未来：低炭素社会をつくるために	水谷洋一（人文学部准教授）	106
2	6/6	地球環境のマイクロ世界で何が起きているのか：地球温暖化と関係あるの？	鈴木 款（創造科学技術大学院・理学部教授）	95
3	7/4	環境思想の系譜：エコロジーはどういう考え方か	芳賀直哉（大学教育センター教授）	104
4	8/1	環境「リスク」としての地球温暖化：環境問題の社会的見方	平岡義和（人文学部教授）	97
5	9/5	植物の力が私たちを助ける	本橋令子（農学部准教授）	87
6	10/3	富士山をとり巻く植物群落を知る：-1000mから3776mへ	増沢武弘（理学部教授）	88
7	11/7	農業は環境を破壊するか：アフリカ熱帯雨林の焼畑・混作農業	小松かおり（人文学部准教授）	70
8	12/5	社会と自然の関わりを知る：私たちの未来へ向けての環境教育	大塚謙一（教育学部教授）	68
9	1/9	生、死、自然：人間と環境の関係をたずねて	竹之内裕文（創造科学技術大学院・農学部准教授）	78
10	2/6	② 21世紀の羅針盤を求めて ②市民とともに進める環境保全：棚田再生の記録	①松田 智（工学部准教授） ②中井弘和（名誉教授）	81

静岡大学・中日新聞連携講座「くらしをひらく最先端」

実施状況および来年度の計画について

回	日付	タイトル	講師	参加者
1	10/17	水をめぐる最先端 「水を活かす」「水を生き返らせる」	戸田三津夫（工学部准教授） 宗林留美（理学部助教）	26
2	11/15	匠の技を現代に～はままつデジタルマイスター養成プログラムが指すもの～	中村 保（工学部教授）	41
3	12/12	未来の科学者を育てる～ものづくり理科教育支援ネットワーク・浜松RAIN房の挑戦～	藤間信久（工学部教授）	30
4	1/9	子育てのコツ、教えます～子育て支援デジタルコンテンツの構築を目指して～	竹林洋一（創造科学技術大学院教授） 桐山伸也（情報学部助教）	50
5	2/13	未来のテレビはこうなる～画像工学の現在と未来～	三村秀典（電子工学研究所所長） 猪川 洋（電子工学研究所教授）	45

開催概要

- 名称 静岡大学創立60周年事業 静大フェスタ
- 主催 静岡大学
- 後援 静岡県
- 日時 2009年5月30日(土)、31日(日) 10:00~16:00
- 実施会場 静岡市駿河区 ツインメッセ 北館
- 来場者数 30日(土) 1160名 31日(日) 1983名 2日間 合計:3143名
- 協力企業 「古庄自動車学校」「あさひテレビ」「株式会社 タミヤ」
「Honda Cars 静岡」「㈱TOKAI」「マルコメ株式会社」
(順不同、敬称略)

会場レイアウト



メインステージ

メインステージ	
5月30日(土)	
10:00~10:30	静岡大学創立60周年記念式典
10:30~12:20	シンポジウム 「わたしが語るわたしの静岡大学」
12:30~12:55	龍敬太鼓
12:55~13:25	邦楽部 よさこい演舞サークル 「鞠兜殿」
13:25~13:50	空手道部
13:50~14:00	テコンドー部
14:00~14:15	アカバシサークル 「Aoi-Lied」
14:15~14:40	教育学部音楽科
5月31日(日)	
10:00~10:15	人文社会科学部1年・川内会報 「現実感のある心象表象体験」
10:15~10:30	人文学部芸術文化学科・1、2年生 「情報観証論」
10:30~10:45	人文学部経済学科・3、4年生 「国語法選考判決を受けて」
10:45~11:00	人文学部経済学科・3、4年生 「地域開発論」
11:05~11:20	教育学部国語科を中心とする学生 NPO法人「しじま土曜倶楽部」での 小学生対象の英語活動 「学生フォーミュラ大会への挑戦」
11:25~11:40	工学部電気電子工学科4年・野々村知英 「学生フォーミュラ大会への挑戦」
11:40~11:55	工学部2年・秋田達哉 「私塾の浄化を目指して」
12:00~12:15	農学部1年・江岸美空 「土を愛わなくても安心・安全で おいしい野菜を生産できる」 実は環境にもやさしいって 知ってましたか?」
12:15~12:30	理学院理学部1年・藤島みずさ 「ササの下で生きるアサの子供たち 炭素のやりくりと生き残り作戦」
12:35~13:05	モダンダンス部
13:05~13:30	大道芸サークル Waps
13:30~14:25	ジャズサークル S-S-H
14:25~14:40	音楽愛好会
15:15~15:45	吹奏楽団
15:45~	閉会式

●創立60周年記念式典 (30日)



●シンポジウム (30日) 「わたしが語るわたしの静岡大学」



●学生による研究発表 (31日)





静岡大学創立60周年記念 浜松キャンパス『ホームカミングデー』



(会場: 佐鳴会館会議室 & ホール)

第1部: 大学紹介 [11:30~12:15]

- ◇ 学長挨拶 (学 長 興 直 孝)
- ◇ 学部等紹介
 - ・工学部 (学部長 柳沢 正)
 - ・情報学部 (学部長 伊東幸宏)
 - ・創造科学技術大学院 (院 長 永津雅章)
 - ・電子工学研究所 (所 長 三村秀典)
 - ・浜松工業会 (理事長 下平美文)

第2部: ランチパーティー [12:15~13:30]

- ◇ 開会
- ◇ 乾杯
- ◇ ご歓談
- ◇ 卒業生等のお話
- ◇ 大学クイズ
- ◇ 閉会

(終了後、希望者は、高柳記念館や各学科棟へご案内)

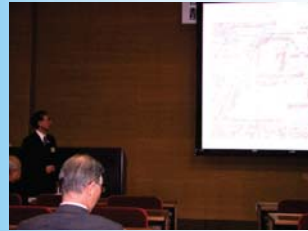
Shizuoka University



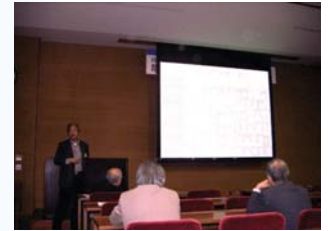
静岡大学創立60周年記念 浜松キャンパス『ホームカミングデー』



◆学部紹介(工学部・柳沢 正学部長)



◆学部等紹介(情報学部・伊東幸宏学部長)



◆学部等紹介(浜松工業会・下平美文理事長)



◆卒業生等のお話



◆第2部の様子



◆第2部の様子



Shizuoka University



静岡大学創立60周年記念 静岡キャンパス『ホームカミングデー』



第1部: 大学の近況紹介 [11:30~12:15]

- ◇ 学長挨拶 (学 長 興 直 孝)
- ◇ 学部等紹介
 - ・人文学部 (学部長 佐藤 誠二)
 - ・教育学部 (学部長 石井 潔)
 - ・理学部 (学部長 村井 久雄)
 - ・農学部 (学部長 高木 敏彦)
 - ・文理・人文学部同窓会 (副会長 小林 五郎 氏)
 - ・教育学部同窓会 (副会長 林 のぶ 氏)
 - ・理学部同窓会 (会 長 浅野 安人 氏)
 - ・農学部同窓会 (副会長 芹澤 拙夫 氏)

第2部: ランチパーティー [12:15~13:30]

- ◇ 開会 (理事 山本 義彦)
- ◇ 挨拶 (理事 西村 直章)
- ◇ 乾杯 (同窓生代表者)
- ◇ 歓談・飲食
- ◇ 卒業生等のお話
- ◇ 大学クイズ
- ◇ 閉会

Shizuoka University



静岡大学創立60周年記念 静岡キャンパス『ホームカミングデー』



◆興 直孝学長挨拶



◆学部等挨拶(教育学部・石井 潔学部長)



◆理学部同窓会(会長・浅野安人氏)



◆学乾杯(同窓生代表)



◆第2部の様子



◆第2部の様子



Shizuoka University

海外フィールドワーク演習

Practice in field works abroad

担当教員：水永 博己

分担教員：瀧川 雄一・八幡 昌紀

クラス 共生バイオ・応用生物化学・環境森林

学期 通年/ 必修選択 選択/ 対象学年 2年/ 単位数 1/ 曜日・時限 集中

キーワード 熱帯農業・熱帯雨林生態系修復・熱帯地域の食品加工

授業目標

1：熱帯地域における農業・森林再生・食品加工について理解を深め、自然環境や社会環境が食糧生産や環境保全のシステムに及ぼす影響について学ぶ。

2：農林業や食糧生産の専門科目を海外の学生とともに学び交流することで、海外における専門関連のコミュニケーション能力を身につけ、海外でのフィールドワークのノウハウを学ぶ。

学習内容

インドネシアガジャマダ大学と協力して、現地での農林業・食品加工の実態を学ぶ

森林再生の現場や伝統農場において現地の学生とともに実習を行い、学生間のコミュニケーションを通じて海外でのフィールドワークのノウハウを学ぶ。

授業計画

- 1：インドネシアの歴史と自然環境（国内講義）
- 2：海外での安全なフィールドワーク（国内講義）
- 3：インドネシアの農林業（現地講義）
- 4：海岸農業・オイル工場の視察
- 5：熱帯林の再生と森林内実習 ワナガマ演習林
- 6：熱帯の森林（現地夜間講義）
- 7：伝統農業とファームステイ
- 8：熱帯農業実習
- 9：農園視察
- 10：発表会（国内講義）

受講要件

海外でフィールドワークを行うため心身ともに健康であり、パスポート・ビザ等の取得が可能なこと。父母または保護者の同意があること。海外傷害保険に加入すること。人数が多い場合人数制限を行うことがある。また参加者が5名未満の場合には中止することがある。渡航経費は

自己負担とする。講義は10月初旬の通常講義期間中に行うので、他の講義科目の担当教員と本実習受講について協議しておくこと。

テキスト・参考書なし

予習 渡航前に日本の農林業や自分の専門課程について英語で簡単な説明ができるようにしておくこと。

成績評価

フィールドでの実習態度	50%
グループ発表会	30%
レポート	20%

オフィスアワー 実習期間中は随時可。実習前後はメール等でアポイントをとってほしい

海外留学派遣学生数
outbound students

大学間協定に基づく交換留学(派遣)
exchange students based on University Agreements(outbound)

(年度)

大学名 Universities	国名 Countries	平16 2004	平17 2005	平18 2006	平19 2007	平20 2008	計 Total
ネブラスカ大学オマハ校 University of Nebraska at Omaha	アメリカ U.S.A.	3	2	2	1	1	9
アルバータ大学 University of Alberta	カナダ Canada	1	2	1	1	1	6
朝鮮大学校 Chosun University	韓国 Korea		1	1	2		4
浙江大学 Zhejiang University	中国 China	1	2	1		1	5
ナンシー第2大学 Nancy 2 University	フランス France		2	2	1	3	8
ブッパートル大学 Wuppertal University	ドイツ Germany					1	1
嶺南大学校 Yeungnam University	韓国 Korea					1	1
アレクサンドル アイオアンクザ大学 Alexandru Ioan Cuza University	ルーマニア Romania					2	2
コメニウス大学 Comenius University	スロバキア Slovakia					2	2
ゴメル国立大学 Gomel State University	ベラルーシ Belarus					1	1
計 Total		5	9	7	5	13	39



浙江大学(中国)
Zhejiang University (China)



コメニウス大学(スロバキア)
Comenius University (Slovakia)

ILUNO ネブラスカ大学オマハ校集中英語学習プログラム
Intensive Language Program at the University of Nebraska at Omaha

(年度)

大学名 Universities	平16 2004	平17 2005	平18 2006	平19 2007	平20 2008	計 Total
ネブラスカ大学オマハ校 University of Nebraska at Omaha	7	6	7	8	14	42



ネブラスカ大学オマハ校(アメリカ)
University of Nebraska at Omaha (U.S.A.)



夏季短期留学
Summer Tour

(年度)

大学名 Universities	平16 2004	平17 2005	平18 2006	平19 2007	平20 2008	計 Total
ネブラスカ大学オマハ校 University of Nebraska at Omaha	9	19	14	23	14	79
アルバータ大学 University of Alberta	22	12	15	17	16	82
朝鮮大学校 Chosun University	16	16	8	5	6	51
計 Total	47	47	37	45	36	212



2008 朝鮮大学校夏季短期留学
Summer Tour to University of Chosun (2008)



2008 ネブラスカ大学オマハ校
夏季短期留学
Summer Tour to University of
Nebraska at Omaha (2008)



2008 アルバータ大学
夏季短期留学
Summer Tour to University of Alberta (2008)



平成22年 2月23日

国立大学法人静岡大学
学長 興 直孝

様

独立行政法人国際協力機構
契約担当役
理事 上田 善久
(公印省略)

コンサルタント等登録通知書

貴社より申請のありましたコンサルタント等登録については、審査した結果、
下記のとおり申請を承認いたしましたので通知します。

記

登録番号 01750
登録年月日 平成22年 3月 1日
登録の条件 別紙1「登録の条件」のとおり

以 上

(別紙1)

登録の条件

貴社を下記条件によって登録いたしました。当機構の登録制度の趣旨は次のとおりであることをご了知下さい。

- 1 コンサルタント等の登録は、当機構が公的機関として契約事務を行うにあたって、公正性を維持すること及び開発途上国への技術協力の要請に迅速・的確に対応するため、業務に契約をもって従事することを希望するコンサルタント等に関する情報資料を整備することを目的としていること。
- 2 当機構がコンサルタント等を必要とする特定業務を実施する場合に、当該業務に契約によって従事するコンサルタントは、当機構の内部規程に定める契約事務手続きによって、原則として登録コンサルタント等から選定されるものであること。
- 3 コンサルタント等が登録されたことによって、当機構が実施する業務に自動的に従事する資格を得たものではなく、また、当該コンサルタントの一般的資格に関することについて当機構がこれを保証するものではないこと。

また、登録に際する条件は下記のとおりですのでご留意下さい。

記

1 登録にあたっての義務

(1) 毎営業年度経過後4か月以内に次の書類を機構に提出すること。

- ア 年次報告書.....様式第2号
- イ コンサルタント等登録カードA.....様式第4号の1
- ウ コンサルタント等登録カードB.....様式第4号の2
- エ コンサルタント等登録カードC.....様式第4号の3
- オ 財務諸表(直前1営業年度分、決算時のもの)
- カ 納税証明書(提出日から起算して3ヶ月以内発行、その3の3、原本)
- キ その他参考資料等